

古事記と儒家を主とした中國思想の關係交渉について（その七）

田 所 義 行

古事記成立と關聯して儒家思想受容の一般的考察（上）

中國の儒家の思想や學問が日本に傳來し、日本人がそれを受容したことの一般的な原則は、當時の日本の社會の様相と重大な關係があることが考へられる。そこで中國の儒家の思想や學問の受容についての一般的な原則を究明しようとするれば、先づ當時の日本の社會の基本的な性格を明かにして、かからなければならない。

中國の儒家の思想や學問を受容して、元明天皇の和銅五年（七一三）に古事記が成立した。その前後の日本が奴隸制の社會であつたことは異論があるので、ここで一應この問題を中心として、その様相を明かにしておかねばならぬと思ふ。大體日本の歴史の記録が古事記にしろ日本書紀その他の國史にしろ、何れも當時の上層支配者階級を主としたものであつて、實質的に當時の社會を背負つた被支配者や奴隸についての記録は希有である。そこで今日からは當時の社會の實態、殊に被支配者の負擔した社會的業績は容易に知る事が出来ない。さうした記録の缺如と探求困難によつて、一方的に記録された支配者側の事情とによつて、日本には上古以來かつて奴隸制社會といふものは存在しなかつたとの論も生れて來るわけであるが、それらはただ文献による實證科學的な見解であつて、必ずしも當時の社會の實態を洞破したものではない。

古事記の神代の卷に、大國主神が根の堅洲國から須世理比賣をつれて逃げ歸る時、速須佐之男命が黃泉比良坂まで追駈けて來て、遙かに大

國主神に呼びかけ、「其汝所持之生大刀、生弓矢以、而汝庶兄弟者、追伏坂之御尾、亦追撥河之瀬、而意禮、爲大國主神、亦爲宇都志國玉神、而其我之女須世理比賣、爲嫡妻、而於宇迦之山本、於底津石根、宮柱布刀斯理、於高天原、冰椽多迦斯理、而居、是奴也」とあるが、この場合の奴は、いまだ奴隸といふ意ではないが、奴といふ言葉は、普通一般人とは違つたものであることを示してゐる。この時速須佐之男命は大國主神を女婿として許した上での、呼かけの言葉であるが、はるかに目下に見下したものである。だから奴と言つたであらう。

古事記の中卷で、神倭伊波禮毘古命の伊呂兄五瀬命は、その手に、登美能那賀須泥毘古が、痛矢串を的てたとき、詔して「吾者爲日神之御子、向日而戰不良、故負賤。奴之痛手、自今者、行廻而背負日以擊期、而自南方廻幸之時、到血沼海、洗其御手之血故謂血沼海也、從其地廻幸、到紀國男之水門、而詔、負賤。奴之手乎死、爲男建而崩」とある。この賤奴といふのも、いまだ必ずしも奴隸を意味するものではないが、戦ひ勝てばやがて奴隸として取扱ふものである意を寓してゐると考へられないことはない。

古事記下卷において、市邊之忍齒別王が大長谷王子に淡海の久多綿の蚊屋野の狩場で殺された時、市邊之忍齒別王の二子意富祁王と袁祁王は難を避けて逃れ、針間國の豪族志自牟の家で牛甘・馬甘をしてゐたことがあるが、この牛甘・馬甘といふのは、奴隸の仕事であつたと思はれる。しかもこの牛馬は、鑑賞用・娯樂用のもではなく、まさしく農耕用・牧畜用のものであつたと思はれる。この二人はこれよりさき山代の荊羽井で面黥の老人の猪甘なるものに糧を奪はれたことがあるが、この山代の猪甘なるものも、また奴隸であつたと思はれる。この猪は野猪のことではなくて豚のことで、家畜として飼育してゐたものであらう。さて山部連小楯が針間國の宰となつて赴任したとき志自牟の家に招かれ、その新築落成の宴會場で弟の袁祁王が、

物部之

もののふの

我夫子之

わがせこの

取佩

取りはける

於大刀手上

大刀のたがみに

丹畫著

丹かきつけ

其緒者

その緒には

載赤幡

赤はたをたち

立赤幡

赤はたを立て

見者五十隠

見ればいかくる

山三尾之

山の三尾の

竹矣訶岐茹

竹をかき茹り

末押麿魚簀

末押し麿かすなす

如調八弦琴

八弦の琴を調べるがごと

所治賜天下

天下を治め賜ひし

伊邪本和氣天皇之御子

伊邪本和氣天皇の御子

市邊之押齒王之奴末

市邊之忍齒王の奴の末

この奴末は延佳本では末奴とあるが、何れにしても、ここでは市邊之忍齒別王の二子が奴隸として取扱はれてゐたことを示すものである。しかるに當時にあつても、奴といふ呼稱は一般的に卑下した自稱に用ひ、また天皇は奴隸でない一般臣下をも激怒した場合などには奴と呼んでゐたと思はれるふしがある。

大長谷若建天皇が、日下に住んでゐた大后のもとへ行かれ、日下之直越から河内に出られるさい、山上から國見をして堅魚を上げた舎屋があるのに氣づき、天皇は「其上堅魚作舎者、誰家」と問ねた。臣下が「志幾之大縣主家」と答へると、天皇は激怒して「奴乎、己家、似天皇之御舍而造」と詔し、臣を使はしてその家を焼かしめようとされた。その時大縣主が懼畏稽首して「奴有者、隨奴不覺而過作、其畏」と言ひ、能美之御幣物を天皇に献上し、白い犬に布をかけ鈴をつけ、己の一族である名は腰佩といふ者に、犬の繩をとらせて献上したので、許されて家は焼かれなかつたとある。これは志幾の大縣主のことであつて、奴隸ではなかつたであらうが、天皇は激怒して奴と罵つてゐるし、また自

らも奴と卑下してゐる。

同じく古事記下巻に見える、大長谷若建王が、兄の穴穗天皇を弑した目弱王を仇讎として、軍勢を催し、目弱王の隠れてゐた都夫良意富美の家を取圍んだ話がある。その時に都夫良意富美は「……自往古、至今時、聞臣連隱於王宮、未聞王子隱於臣之家、是以思、賤奴意富美者、雖竭力戰、更無可勝、然特已、入坐于隨（隱？）家之王子者、死而不棄」と言つてゐる。この都夫良意富美は臣・連の臣に屬する家柄で、女の詞良比賣は大長谷若建王の戀人であり、斷じて奴隸の家ではなかつた。しかるに彼自らは、賤奴と自稱してゐる。これは天皇の弟である大長谷若建王に反抗するといふところから、特に自卑して賤奴と言つたといふこともあらうし、天皇の弟であり、やがて天皇になれるであらう大長谷若建王子と、臣都夫良意富美とは、非常な身分の相異があつたので、奴と自稱したであらうことも考へられる。故にこれも、直接に奴隸といふ意ではない。

日本書紀によれば、神代の卷の一書に曰くに、兄の釣針を紛失した彥火々出見尊が、海神に助けられて兄の火酢芹命から借りてゐた鉤を得、歸つて來て兄にこれを返さうとしたが兄は怒つて受取らうとしない、そこで彥火々出見尊は海神からさづかつて來た潮湓瓊を出して兄を溺らせ困しめると、兄の火酢芹命はすっかり降参して弟に許しを乞ひ「吾當事汝爲奴僕、願垂救活」とあり、また彥火々出見尊の妻の豐玉姬が出産に當つて夫が妻との約束を守らず、出産の様子をのぞいたので、妻の豐玉姬命は大いに恨み、「不用吾言、令我屈辱、故自今以往、妾奴婢至君處者、勿復放還、君奴婢至妾處者、亦勿復還、遂以眞床覆衾及草、裹其兒、置之波瀾、卽入海去矣」とある、これ等は後世の奴隸の意であらう。景行天皇の四十年に日本武尊が東征して、その酋長等を俘虜にしたことを「俘其酋師而令從身」とあり、更に四十三年には日本武尊が伊勢の能褒野で病革つたとき「以所俘蝦夷等、獻於神宮」とある。仁德天皇の五十三年に新羅を討ち大將田道が「虜四邑之人民、以歸焉」とあつたり、崇峻天皇の時、蘇我馬子宿禰大臣が泊瀬部皇子、厩戸皇子、春日皇子等と共に大連の物部守屋を征め滅さんと謀つた。そこで大連物部守屋は親ら「率子弟與奴軍、築稻城而戰」とある。この時厩戸皇子は額に束髪して從軍し、新度して願をかけねば勝てぬと考へ、白膠木を断り、急いで四天王像を作り、頂髪にのせ、誓言して、この軍に勝たしむれば、護世四王のために寺塔を建てんと、馬子もまた誓言した。やがて迹見首赤檮が大連を射殺し、大連の軍は潰へた。實は馬子の妻は守屋の妹であつた。大連を亡ぼしてから馬子らは「於攝津國、造

四天王寺、分大連奴半與宅、爲大寺奴田庄」とあり、また皇極天皇二年に蘇我入鹿が上宮太子の子孫を斑鳩に襲撃してこれを滅したが、その時「蘇我入鹿遣小德巨勢德大臣、大仁土師婆婆連、掩山背大兄王等於斑鳩、於是、奴三成與數十舍人、出而拒戰」とあり、上宮聖德太子傳補闕記には「斑鳩寺被災之後……百濟聞師圓明師、下水君雜物等三人、合造三井寺、家人馬手、草衣之馬手、鏡中見、凡波多、犬甘弓削、薦何見等、並爲奴婢、黑女連麻呂爭論麻呂弟萬須等、仕奉寺法頭、家人奴隸等根本妙教寺令白定」とあり、これ等もまた前の彦火々出見尊が兄を征服したと同様、征服によつて被征服者を奴隸とした例である。

日本書紀によれば、履中天皇の五年に天皇淡路島に狩し、時に河内飼部等が扈從したが「先是、飼部之黥、皆來差、時居島、伊奘諾神託祝曰、不堪血鼻矣、因以卜之、兆云、惡飼部等黥之氣、故自是後、頓絕以不黥飼部而止之」とあつたり、雄略天皇の十一年に官禽が狗に斃されたとき、「鳥官之禽爲菟田人狗所嚙死、天皇瞋、黥面而爲鳥養部」とあつたり、また武烈天皇八年には天皇は「使女裸形坐平板上、牽馬就前遊牝、觀女不淨、沾濕者殺、不濕者沒爲官婢」とあり、欽明天皇二十三年には、馬飼首歌依の二子が火刑に處せられようとしたとき、母が宥を請うたのに對し、「投兒火裏、大災果臻、請付祝人、使作神奴、乃依母請、許沒神奴」とある。

これ等はいづれも罪人か奴隸にされた例である。

古代の奴隸は、力の弱いもの、窮亡者であつたが、上述のやうに征服者は被征服者を捕虜としてこれを奴隸とし、あるひは犯罪者を奴隸としたりして出来たものである。さうした奴隸には貴族の私する私奴もあり、上が公にもつてゐる官奴もあり、また神奴・寺奴等もあつた。

日本で最初に起つた著名な征服は、天照大御神の一族が大國主神の一族を征服した神話である。この時大國主神の一族は被征服者であるが、彼は奴隸としては取扱はれなかつた。古代に於ては、およそ被征服者は、奴隸として取扱はれるはずであつたのに、大國主神はさうされなくて古事記の神代の卷によれば、大國主神は國土を天神に献上して後、天神の御子と同じやうな立派な宮殿を造營して、その中に居られるといふことになつてゐる。即ち

「此葦原中國者、隨命既獻也、唯僕住所者、如天神御子之天津日繼所知之、登陀流天之御巢、而於底津石根、宮柱布斗斯理、於高原、氷木多迦斯理、而治賜者、僕者於百不足八十垌手、隱而侍」

とある。

日本書紀の一書によれば、高皇產靈尊が、大國主神の言を嘉納し、これに答へた形で出てゐる。即ち

「今者聞汝所言、深有其理、故更條々而勅之、夫汝所治顯露之事、宜是吾孫治之、汝則可以治神事、又汝應住天日隅宮者、今當供造、即以千尋栲繩結爲百八十紐、其造宮之制者、柱則高大、板即廣厚、又將田供佃、又爲汝往來遊海之具、高橋浮橋及天鳥船、亦將供造、又於天安河亦造打橋、又供造百八十縫之白楯、又當主汝祭祀者、天穗日命是也」

とある。

これ等によると、被征服者である大國主神は天照大御神の一族の奴隸にされたわけではないやうに見える。しかるに仔細にこれを觀るに、日本書紀の一書においては、前記の文に續いて

「於是大己貴神報曰、天神勅教慰懃如此、敢不從命乎、吾所治顯露事者、皇孫當治、吾將退治幽事、乃薦岐神於二神曰、是當代我而奉從也、吾將自此避去、即躬披瑞之八坂瓊而長隱者矣」

とあり、日本書紀の本文には

「故大己貴神便以其子之辭、白於二神曰、我怙之子、既避去矣、故吾亦當避、如吾防禦者、國內諸神必當同禦、今我奉避誰復敢有不順者、乃以平國時所杖之廣矛、授二神曰、吾以此矛卒有治功、天孫若用此矛治國者、必當平安、今我當於百不足之八十隈將隱去矣、言訖遂隱」
とあり、古事記の神代の卷の前記の文に續いて、宣長は「乃隱也、故隨白而」と補つてゐるが、これは日本書紀の意を承けて、古事記を補つたものであらう。私がここで問題としたいのは、古事記でも「僕者於百不足八十垺手、隱而侍」といひ、日本書紀でも「即躬披瑞之坂瓊而長隱者矣」といひ、また「今我當於百不足之八十隈將隱去矣、言訖遂隱」といひ、大國主神は結局天照大御神に降伏すると同時に身を隱したといふことである。自分の子の事代主神も承知の上で、天上神に降伏したのに、何故大國主神は身を隱さなければならなかつたであらうか。

天照大御神の意にさからつて、抵抗すれば殺されるにきまつてゐる。天上神の命令は絶對であつて至上である。古事記によれば、建御名方神は、まさに科野の洲羽海のはとりで、建御雷之男神に殺されさうになつて「恐莫殺我、除此地者、不行他處、亦不違我父大國主神之命、不

違八重事代主神之言、此葦原中國者、隨天神御子之命獻」と白して、漸く死からまぬかれてゐる。日本書紀によれば「於是二神誅諸不順鬼神等」とあり、また日本書紀の一書では「故經津主神以岐神、爲鄉導、周流削平、有逆命者、卽加斬戮」とある。かくの如く天上神の命令は絶對至上であつた。そこで大國主神も、心ならずも天上神に屈從したであらう。天上神の徳になびき感じてのことであるやうには、記紀には見えない。屈從は恥づべきことであるが、この際大國主神はその恥づべき屈從をさへ忍んで屈從し、地上の國土を天上神にささげた。若し大國主神が屈從を恥づべしとし、忍ぶべからざるものであるとすれば、彼は屈從しなかつたであらう。建御名方神のやうに降參はせず、殺されたであらう。しかるに記紀が大國主神をさうさせてないところは、記紀の作者を含めて、當時の日本人をして、さうさせることが出来なかつた、大國主神に對する美しい感情といふやうなものがあつたのであらう。大國主神を殺させなかつたばかりか、屈從を餘儀なくされた大國主神をして、せめて最後の意地を張らせて、記紀に見えるやうに「唯僕傳所者、如天神御子之天津日繼所知之登陀流天之御巢、而於底津石根、宮柱布斗斯理、於高天原氷木多迦斯理、云々」といはせてゐる。これは卽ち屈從はしたが、根から屈從したのではない、まだこの位の意地も張りもあるぞとの、最後のせつない嘯であると思ふ。屈從しながら、何故こんな虚勢を張らなければならなかつたであらう、否張らさなければならなかつたであらう。それは畢竟、この次に來るものは被征服者として、奴隸にされるといふことではなかつたであらうか。大國主神は力足らずして征服はされたが、奴隸にまでは落ちたくなかつたし、作者もまた彼を奴隸には落したくなかつたであらう。そこで、かく屈從しながらも、しかもなほ虚勢を張らせ、さうして次に來るものに對しては敢然として抵抗させた。卽ちそれは「隱而侍」といふことであり「言訖遂隱」といふことであつて、神としての現身を現世から隠したわけである。若し天上神に心伏して、奴隸となることをも恥ぢなかつたなら、隠れる必要はなかつたであらう。甘んじて奴隸となり、許された宮殿に住みついてゐればよかつたであらう。前引日本書紀の一書に曰くの中に「又將田供佃」とあるが、これは本來土地を貸して小作せしめる意であるが、大國主神程の地上神としての有力な地位のあつたものが、天上神の小作人に轉落するといふのは、まさしく奴隸とは言はなくても、奴隸として待遇されたと同じことであらう。日本書紀の一書に曰くの中には次のやうな文もある。

「歸順者、仍褒美、是時歸順之首渠者、大物主神及事代主神、乃合八十萬神於天高市、帥以昇天、陳其誠欸之至、時高皇產靈尊、勅大物主神、

汝若以國神爲妻、吾猶謂汝有疏心、故今以吾女三穗津姬、配汝爲妻、宜領八十萬神、永爲皇孫奉護、乃使還降之」

これは、捕虜として一度天上神のもとにひかれて行つた地上神が、奴隸として宣誓させられたところではなからうか。大物主神は、この時捕虜の首渠であり、しかも忠實に歸順宣誓に應じたのであるから、やはり奴隸となつた地上神の首長としての地位を保有せしめ、それがために高皇產靈尊は女の三穗津姬を彼に與へて妻たらしめ、大物主神の心を懷柔したのであらう。女を妻したとはいへ、必ずしも愛婿とするの意ではなくて、愛婿のやうに見せかけるのは、彼を懷柔する政略的手段であつた。その前に高皇產靈尊は、大物主神に對して、汝若し國神を妻とするやうであれば、汝はなほ疏心があるものと認めると言つてゐるので、大物主神には最早や自分の結婚に對する自由は許されない。結婚の自由がこれ程束縛されるといふことは、ひどく人格を認められないわけである。奴隸とは全然人格を認められないもので、結婚の自由がかく束縛されたことだけでは奴隸とは決められなくても、それに近い待遇であつたことを示唆するものではなからうか。

被征服民族が征服民族の奴隸にされた時でも、その被征服民族中で特に恭順であつた首長級の人物が、許されてその民族の一部を率ゐて、祖先の祭祀を保存させて貰つた例は、中國にもある。例へば周代の宋國の如きがそれである。大物主神の場合は周代の宋國の如き例ではないが、周代の「懷姓九宗、職官五正」と同様に考へてよいと思ふ。このことは次號で詳説するであらうが、ここで一言すれば、殷の懷姓七族は周の被征服民族であつて、周の奴隸として收容されたものであり、しかもその懷姓九族の首長は、奴隸を率ゐる長として、同じ奴隸ではあるが、五正の官職を與へられて、優遇されてゐる。大物主神も地上の奴隸神たちを率ゐる部の長として、特に高皇產靈尊から、その女を賜うて、優遇されたものであると考へることが出來よう。しかし、それかと言つて、彼が奴隸から免除されたわけではあるまい。

しかるに古事記にも日本書紀にも、大物主神や事代主神をはじめとして、地上の神々が天上神に征服されて、ことごとく奴隸にされたとの明かな記録はない。古事記や日本書紀の記録の文意を通して、さう推察せられるだけである。今一つ古事記の神代の卷には次のやうな記録がある。

「故爾天津日子番能邇邇藝命……天降坐于竺紫日向之高千穗之久士布流多氣……於是詔之、此地者向韓國、眞來通笠沙之御前、而朝日之直刺國、夕日之日照國也、故此地甚吉地、詔而於底津石根、宮柱布斗斯理、於高天原、氷椽多迦斯理、而坐也……於是、送媛田畏古神、而還到、

乃悉追察鰭廣物鰭狹物、以問言汝者天神御子仕奉耶之時、諸魚皆仕奉白之中、海鼠不白、爾天宇受賣命、謂海鼠、云此口乎、不答之口、而以紐小刀、拆其口、故於今海鼠口拆也」

ここに諸魚類、鰭廣物、鰭狹物を天神に奉仕させたといふのは、これは多分に奴隸か賤民を暗示するものだと考へてよからう。普通の神人でない人間に奉仕させる事によつて、古代の社會は成立してゐたと考へるべきであらう。當時の社會では、魚類貝類は主要な食糧であつて、この食糧の獲得供給の役を課せられてゐた人間は、普通の神人ではなくて、これは一種の奴隸か賤民と認むべきものであつたであらう。だからして、それを人間と言はずに神人とは類を異にする生物と考へてゐたであらう。

神話の世界に神人とは區別して、凡そ動物の名をもつた存在は、恐らく奴隸か賤民に屬するものであつたであらう。さうした例は、この海鼠が天宇受賣命に口を拆かれた話のすぐ前にもある。即ち

「故其猿田毘古神、坐阿邪訶、時爲漁、而於比良夫貝、其手見昨合、而沈溺海鹽、故其沈居底之時名、謂底度久御魂、其海水之都夫多都時名、謂都夫多都御魂、其阿和佐久時名、謂阿和佐久御魂」

とある。

ここに猿田毘古神が漁獵をしてゐて比良夫貝にその手を挟まれて、竟に海水に沈溺したといふ、その比良夫貝といふのも、實は後に天上神によつて奴隸か賤民にされた地上神の側の民であつたと思ふ。この地上神側の民が何故同じ地上神側の貴族に當る猿田毘古神を海中に引込んで溺死させたかといふに、それは本當の支配者である大國主神の敗北隱身に同情し、同時に猿田毘古神が舊主の恩を思はず、新しく天降つて來た天上神の御子に阿附追従し、天降りに嚮導したことを憎んでの所業であつたと見ることが出来るであらう。かうした理由はさて置き、ここに比良夫貝とあるのは食糧供給をつかさどる奴隸か賤民であつたと解釋して間違ひなからう。

更にまた大國主神に助けられた稻羽の菟も、この菟の毛をむしり取つた和邇もまた大國主神が八十神に計られ赤猪に似た燒石を抱かされて死んだとき、これを助けた蚌貝比賣も蛤貝比賣も、これらは皆奴隸か賤民かであつたであらう。速須佐之男命に亡ぼされた八俣遠呂智は山賊化した荒ぶる賤民であつたに違ひない。

有史以前の神話傳説の世に奴隸や賤民がゐたといふことは道理に適はぬ、をかしい話であつて、いまだ奴隸制の世になる以前の原始共產制に近い世であつたと思はれる。それなのに、日本の神話傳説の世にも上述のやうに奴隸か賤民かと想像されるやうなものが存在するのは、これは要するに日本の神話傳説が整理されて、古事記や日本書紀に記録された時代が、日本においては奴隸制の時代であり、しかも奴隸制社會の社會意識のいまだ發達しない貴族の手になつたものであるから、原始共產制に近い神話傳説の世の中に、自然に奴隸制社會の陰翳が二重映しのやうになつて這りこんで行つたものだと思はれる。だから抑々神話傳説が架空の世界のことであると同様に、その世界に存在したやうな形をとつてゐる奴隸か賤民かも、また架空の存在にしか過ぎないものであることは、ここに斷るまでもないことである。ただここで問題にしたいのは、かうした奴隸か賤民かの投影が見られるについては、その投影のもとになつてゐる古事記や日本書紀の記録された時代が奴隸制社會であつたことを間接に立證するところのものであると見ることが出来る。

次にいまだ直接に古代社會の實情を探つてみよう。

古事記の中卷に息長帶日賣皇后が建内宿禰等を率ゐて三韓を征伐した説話がある。その中に

「整軍雙船、度幸之時、海原之魚、不問大小、悉負御船而渡、爾順風大起、御船從浪、故其御船之波瀾、押騰新羅之國、既到半國、於是其國王畏惶奏言、自今以後、隨天皇命、而爲御馬甘、每年雙船、不乾船腹、不乾艫楫、共與天地、無退仕奉、故是以新羅國者、定御馬甘、百濟國者、定渡屯家、爾以其御杖、衛立新羅王之門、云々」

とあるが、ここに軍船の渡航を助けた海原大小の魚とあるのは、勿論徵發された奴隸・賤民のことであらうが、更に新羅の國王が、天皇の命に隨つて御馬甘になり、毎歲貢物を致し、永久に奉仕するといふのは、これはまさしく被征服者として征服者に奴隸として奉仕することを意味するものであらう。百濟國が渡の屯家と定められたのも、同様な意味であらう。しかしこの場合も、未だ明かに奴隸とは言つてゐないばかりか、勿論これ等の被征服奴隸は、日本の主要産業の生産部門に直接に掌つたわけではなく、奴隸としても特異の存在であつたと言はれよう。以上の奴隸の外に、古代社會においては、奴隸とも看るべく、しかし上述の奴隸よりはいくらか人間的な身分を與へられてゐる、部曲なるものが存在し、これが重要生産部門にも關係してゐた。

古事記の中卷、伊久米伊理毘古伊佐知天皇の條に

「爾其御子、一宿婚肥長比賣、故竊伺其美人者、蛇也、卽見畏遁逃、爾其肥長比賣惠、光海原、自船追來故、益見畏以自山多和、引越御船、逃上行也、於是覆奏言、因拜大神、大御子物詔故、參上來、故天皇歡喜、卽返菟上王、令造神宮、於是天皇、因其御子、定鳥取部・鳥甘部・品遲部・大湯坐・若湯坐」

とあり、また

「此天皇、御年壹佰伍拾參歲、御陵在菅原御立野中也、又其大后比婆須比賣命之時、定石稅作、又定土師部、云々」
ともある。

日本書紀卷第六、活目入彥五十狹茅天皇の二十三年の條には

「十一月甲午朔乙未、湯河板舉獻鵠也、與津別命弄是鵠、遂得言語、由是敦賞湯河板舉、則賜姓而曰鳥取造、因亦定鳥取部・鳥養部・譽津部」

とあり、同天皇三十九年の條には

「十月、五十瓊敷命居於茅渟菟砥川上宮、作劍一千口、因名其劍、謂川上部、云々」

とある次に

「一云、五十瓊敷皇子、居于茅渟菟砥河上、而喚鍛名河上、作大刀一千口、是時楯部・倭文部・神弓削部・神矢作部・大穴磯部・泊櫃部・玉作部・神刑部・日置部・大刀佩部、并十箇品部、賜五十瓊皇子、云々」

とある。

古事記中卷、大帶日子游斯呂和氣天皇の條には

「此之御世、定田部、又定東之淡水門、又定膳之大伴部、又定倭屯家、云々」

とあり、また日本書紀卷第七、大足彥忍代別天皇の四十年の條には

「……日本武尊於是、有痛身……既而崩于能褒野……即詔群鄉、命百寮、仍葬於伊勢國能褒野陵、時日本武尊化白鳥、從陵出之、指倭國而飛之、群臣等因以開其棺槨而視之、明衣空留、而屍骨無之、於是遣使者、追尋白鳥、則停於倭琴彈原、仍於其處、造陵焉、白鳥更飛、至河內、留舊市邑、亦其處作陵、故時人號是三陵、曰白鳥陵、然遂高翔上天、徒葬衣冠、因欲錄功名、即定武部也」

とある。古事記中卷、品陀和氣天皇の條に

「此之御世、定賜海部・山部・山守部・伊勢部也」

とあり、日本書紀卷第十の譽田天皇の五年の條には

「秋八月庚寅朔壬寅、令諸國定海人及山守部」

とある。

古事記下卷、大雀天皇の條には

「此天皇之御世、爲大后石之比賣命之御名代、定葛城部、亦爲太子伊邪本和氣命之御名代、定壬生部、亦爲水齒別命之御名代、定蝮部、亦爲大日下王之御名代、定大日下部、爲若日下部王之御名代、定若日下部」

とも、また

「爾天皇聞看、吉備海部直之女、名黑日賣、其容姿端正、喚上而使也」

とも、また

「故爲八田若郎女之御名代、定八田部也」

ともある。日本書紀卷第十一、大鷦鷯天皇の三十八年の條には

「爰天皇語皇后曰、當是夕而鹿不鳴、其何由焉、明日猪名縣佐伯部猷苞苴……今推佐伯部獲鹿之日夜及山野……故佐伯部不欲近於皇后、乃令有司、移鄉于安藝淳田、此今淳田佐伯部祖也」

とあり、また同天皇の四十年の條には

「時皇子（隼別）率雌鳥皇女、欲納伊勢神宮而馳、於是天皇聞隼別皇子逃走、即遣吉備品遲部雄鯉、播磨佐直阿俄能胡曰、追之所逮即殺」
とあり、また同天皇の四十三年の條には

「是日幸百舌鳥野而遊獵、時雌雉多起、乃放鷹令捕、忽獲數十雉、是月甫定鷹甘部、云々」
とある。

日本書紀卷第十四、大泊瀨幼武天皇の二年の條には

「二年秋七月、百濟池津媛違天皇將幸、淫於石河楯、天皇大怒、詔大伴室屋大連、使來目部張夫婦四支於木、置假廩上、以火燒死……群臣不悟陛下因遊獵場置害人部降問群臣……我之厨人鬼田御戸部、眞鉾田高天、以此二人請、將加貢爲害人部、自茲以後、大倭國造吾子籠宿禰、貢狹穗子鳥別、爲害人部、臣連伴造國造又隨續貢、是月置史戸、河上舍人部……史部身狹村主青、檜隈民使博德等也」
とあり、また同天皇九年夏五月の條には

「於是、大連奉勅、使土師連小鳥、作冢墓於田身輪邑、而葬之也、由是大海欣悅不能自默、以韓奴室、兄鷹・弟鷹・御倉・小倉・針六口、送大連、吉備上道蚊嶋田邑家人部、是也」

とあり、また同天皇十一年冬十月の條には

「鳥官之禽、爲菟田人狗所嚙死、天皇瞋、黥面而爲鳥養部、於是信濃國直丁與武藏國直丁侍宿、相謂曰、嗟乎、我國積鳥之高同於小墓、旦暮而食、尙有其餘、今天皇由一鳥之故、而黥人面、太無道理、惡行之主也、天皇聞而使聚積之、直丁等不能忽備、仍詔爲鳥養部」

とあり、また同天皇十四年の條には

「春正月丙寅朔戊寅、身狹村主青等共吳國使、將吳所獻手末才伎漢織吳織及衣縫兄媛弟媛等、泊於住吉津、是月、爲吳客道、通磯齒津路、名吳坂、三月令臣連、迎吳使、即安置吳人於檜隈野、因名吳原、以衣縫兄媛、奉大三輪神、以弟姬、爲漢衣織部也、漢織・吳織・衣縫、是飛鳥衣縫部、伊勢衣縫之先也」

とあり、また同天皇十六年冬十月の條には

「詔聚漢部、定其伴造者、賜姓曰直」

とあり、また同天皇十七年春三月丁丑朔戊寅の條には

「詔土師連等、使進應盛朝夕御膳清器者、於是土師連祖吾弼仍進攝津國來狹狹村、山背國內村、俯見村、伊勢國藤形村、及丹波但馬因幡私民部、名曰贊土師部」

とあり、また同天皇十八年の條には

「……二日一夜之間、不能擒執朝日郎、而物部目連率筑紫聞物部大斧手獲斬朝日郎矣、天皇聞之怒、輒奪菟代宿禰所有猪名部、賜物部目連」

とあり、また同天皇十九年の條には

「春三月丙寅朔戊寅、詔置穴穗部」

とあり、また同天皇二十三年の條には

「此雖朕家事、理不容隱、大連等民部廣大、充盈於國」
とある。

日本書紀卷第十八、廣國押武金日天皇の元年の條には

「大伴大連金村奏稱、宜以小墾田屯倉與每國田部、給賜紗手媛、以櫻井屯倉、與每國田部、給賜香香有媛、以難波屯倉與每郡鑊丁、給賜宅媛……蓋三島竹村屯倉者、以河内縣部曲、爲田部之元、於是乎起、是月、廬城部連枳菖喻女幡媛、偷取物部大連尾興瓊瑤、猷春日皇后、事至發覺、枳菖喻以女幡媛、猷采女丁、并猷安藝國過戸廬城部屯倉、以贖女罪、物部大連尾興、恐事由已不得自安、乃猷十市部、伊勢國來狹狹登伊、贊土師部、筑紫國膽狹山部也」

とあり、また同天皇二年の條には

「夏四月丁丑朔、置勾舍人部・勾鞞部、五月丙午朔甲寅、置筑紫穗波屯倉・鎌屯倉・豐國陸碕屯倉・桑原屯倉・肝等屯倉・大拔屯倉・我鹿

屯倉・火國春日部屯倉・播磨國越部屯倉・牛鹿屯倉・備後國後城屯倉・多禰屯倉・來履屯倉・葉稚屯倉・河音屯倉・婀娜國膽殖屯倉・膽年部屯倉・阿波國春日部屯倉・紀國經湍屯倉・河邊屯倉・丹波國蘇斯岐屯倉・近江國葦浦屯倉・尾張國間敷屯倉・入鹿屯倉・上毛野國綠野屯倉・駿河國稚贄屯倉・秋八月乙亥朔、詔置國國犬養部、云々」
とある。

日本書紀卷第二十四、天豐財重日足姬天皇元年の條には

「是歲、蘇我大臣蝦蟇立已祖廟於葛城高宮、而爲八伯之儔……又盡發舉國之民并百八十部曲、預造雙墓今來、一曰大陵、爲大臣墓、一曰小陵、爲入鹿臣墓、望死之後、勿使勞人、更悉聚上官乳部之民、役使營兆所、云々」
とある。

このほかに、蘭部・神部・祝部・日記部・白髮部等々の部曲に關する記事が、古事記や日本書紀に見えてゐて、百八十部曲が日本の古代に存在してゐたわけである。日本書紀通證によれば、これ等の部曲について

「釋曰、氏奴也、孝德紀、部曲之民、魏志、時郡內李朔等、各擁部曲、害于平民、晉書、本流徙部曲百餘家、史學指南曰、此等幼無所歸、投身衣飯、其主以奴畜之、別無戶籍、唯隨本主籍貫、若此之類、名爲部曲」
と解釋してゐる。

要するにわが國の部曲は、天皇家や臣・連・伴造・國造等の如き貴族やその他諸豪族たちが、私有してゐた隸屬民であつた。純粹な奴隸ほどには、人格を無視されてはゐなかつたが、部曲の主はこれを自己に隸屬する私有財産として取扱つてゐたことにおいては、奴隸と大してかはりはなかつたらしい。

この部曲といふ語は、本來日本の言葉ではなく、中國語から採つたものであつて、中國の漢代には、これを軍隊行伍の意に使用してゐたが、唐代になるとこれを自家所有の家僕の意に用ひてゐた。辭海によれば、次のやうに説明してある。

「本爲軍隊編制之稱、漢書、李廣傳、廣行無部曲行陳、注、續漢書百官志云、將軍領軍皆有部曲、大將軍營五部、部校尉一人、部下有曲、

曲有軍候一人、今廣尙於簡易、故行道之中、而不立部曲也、文選、班固、西都賦、種別群分、部曲有署、其後演變而爲私人所有軍隊之稱、三國志、魏志、鄧艾傳、吳名宗大族、皆有部曲、阻兵仗勢、晉書、祖逖傳、將部曲百餘家、渡江、其後又演變而爲家僕之稱、唐律疏義、部曲、奴婢、是爲家僕、又奴婢、部曲、身繫於主」

なほ日本の古代社會には、屯倉といふものがあることを、上述引證して來たが、屯倉は天皇家に直屬する土地とそれを耕作する部曲の一種だと考へてよいと思ふ。天皇家には、なほ御名代・御子代といふやうな、奴隸と同様の隸屬民をも所有してゐた。

以上のやうな部曲や奴隸の實際の分布狀態やこれが活動狀態等について、いまそれらを明かにする資料は極めてとぼしい。そのとぼしい資料を手がかりとして、臆測をめぐらしてみなければならぬ。

日本書紀によれば、崇神天皇十二年春三月の詔に

「朕初承天位、獲保宗廟、明有所蔽、德不能綏、是以陰陽謬錯、寒暑失序、疫病多起、百姓蒙災、然今解罪改過、敦禮神祇、亦垂教而綏荒俗、舉兵以付不服、是以官無廢事、下無逸民、教化流行、衆庶樂業、異俗重譯來、海外旣歸化、宜當此時、更校人民、令知長幼之次第、及課役之先後焉、秋九月甲辰朔己丑、始校人民、更科調役、此謂男之弭調、女之手末調也、是以天神地祇共和享、而風雨順時、百穀用成、家給人足、天下大平矣、故稱謂御肇國天皇也」

とある。これは崇神天皇の治世に戸籍調査をしたことがあつたのを示すものであり、降つて孝德天皇の大化元年八月・大化二年正月・白雉三年・六五二年に戸籍簿を作り、天智天皇の九年二月・六七〇年に、庚午年籍といふ戸籍簿を作成したことが、日本書紀に見えてゐる。即ち孝德天皇の大化元年八月の詔には

「拜東國等國司、仍詔國司等曰、隨天神之所奉寄、方今始將修萬國、凡國家所有公民、大小所領人衆、汝等之任、皆作戸籍、及校田畝」
とあり、大化二年正月の詔には

「初造戸籍、計帳、班田收授之法、凡五十戸爲里、每里置長一人、掌接檢戸口、課殖農桑、禁察非違、催駈賦役」
とあるし、白雉三年春正月の條には

「是月造戸籍、凡五十戸爲里、每里長一人、凡戸主以家長爲之、凡戸皆五家相保、一戸爲長、以相檢察」
とあり、また天智天皇の九年二月の條には、

「造戸籍、斷盜賊與浮浪」

とある。ところが以上の戸籍は今日全部佚亡してしまつてその内容がどんなであつたか見ることが出来ない。

今日見ることの出来る最も古い戸籍は、大日本古文書に見える、大寶年初に出来たものである。これすらほんの斷片的なもので、日本全國の戸籍簿が遺つてゐるわけではない。當時の日本では庶民の戸を貧富によつて九等に分けてゐたらしい。

上上戸とは、義倉に粟を二石以上納めることの出来る富力のあるもの。和銅元年には資財録百貫文以上の戸であつたが、同八年には三十貫以上と下つてゐる。

上中戸とは、同じく一石二斗納入の戸。和銅元年には四十貫文以上であつたが、同八年には二十貫文以上と下つてゐる。

中上戸とは、同じく一石納入の戸。和銅元年には二十貫文以上の戸であつたが同八年には十五貫文以上と下つてゐる。

中中戸とは、同じく八斗納入の戸。和銅元年には十五貫文以上であつたが、同八年には十貫文以上と下つてゐる。

中下戸とは、同じく六斗納入の戸。和銅元年には十貫文以上であつたが、同八年には六貫文以上と下つてゐる。

下上戸とは、同じく四斗納入の戸。和銅元年には八貫文以上であつたが、同八年には三貫文以上と下つてゐる。

下下戸とは、同じく一斗納入の戸。和銅元年には二貫文以上であつたが、同八年には一貫文以上と下つてゐる。

各戸籍簿には、課と不課の別が記され、課とは國家の調・庸・徭役の義務を課せられたものであつて、これには正丁・少丁・老丁が當る事になつてゐる。正丁とは二十一歳以上六十歳までの男、少丁とは二十歳以下十七歳までの男、老丁とは六十一歳以上の男のことである。

不課とは、課役を免除されてゐるもので、皇族、八位以上の有位者、五位以上の有位者の子、三位以上の有位者の父・祖・兄弟・子・孫と、それから庶人でも綠兒・小丁・耆老・癱疾・篤疾・妻・妾・女・家人・奴婢等である。このうち綠兒とは三歳以下の男兒、小丁とは十六歳以下の男子、耆老とは六十六歳以上の男である。篤疾とは癩病・癩狂・二肢癱・兩目盲のことで、癱疾とは、痴・儒・腰骨折・一肢癱のことで

ある。疾病には、なほ殘疾といふのがあつて、一目盲・兩耳聾・手無二指・足無三指・手足大拇指・禿瘡無髮・久漏・下重・大癰瘡がこれに屬するが、これは全然の免除ではなく、老丁と同じで、正丁の半分の負課の義務である。

戸籍簿では、前述したやうにその年齢によつて、六階級に區別して擔負能力の如何を示してゐる。六階級とは、綠・小・少・丁・老・耆で、それが各男女によつて綠兒・綠女・小丁・小女といふやうに分けられてゐるが、養老令によると、綠は黃、小は少、少は中または次、等と少し名稱がかはつてゐる。

なほ官職や位をもつ者は、勿論戸籍簿に登録し、戸主を最初に記録し、以下戸主との續柄を明かにして妻・妾・子・女・伯・叔・甥・從子・寄口・家人・奴婢等と記してある。

戸籍には、親王家の戸籍簿、貴族の戸籍簿、僧侶や神主の戸籍簿があつたが、これ等も、ことごとく亡びてしまつて、今日現存するものは、庶民の戸籍のうちでも、ほんの一部分に過ぎない。それは、養老五年の調査になる、下總國の葛飾郡大嶋郷の戸籍、同國倉麻郡意布郷の戸籍、同國鉦托郡少幡郷の戸籍と大寶二年の調査になる美濃國の味蜂間郡春部里、同國本寶郡栗栖太里、同國肩縣郡肩肩里、同國各牟郡中里、同國山方郡三井田里、同國加毛郡半布里、同國郡里未詳のもの、筑前國嶋郡川邊里、豐前國上三毛郡塔里、同國上三毛郡加目久也里、同國仲津郡丁里、豐後國戸籍、年次不詳の常陸國戸籍、陸奥國戸籍、因幡國戸籍、讃岐國戸籍、國郡年次共未詳のもの一と、都合二十通だけである。

いまこれ等の戸籍の一例を示してみると次のやうになつてゐる。

豐前國仲津郡丁里、大寶二年籍

戸主丁勝長兄、年漆拾漆歲

耆老、課戸

妻墨田勝赤賣、年肆拾肆歲

丁妻

男丁勝廣國、年貳拾貳歲

正丁、嫡子

男丁勝忍國、年拾陸歲

小子

男丁勝弟國、年拾貳歲

小子

男丁勝身麻呂、年拾歲	小子、上件三口嫡弟
女肥賣、年肆拾貳歲	丁女
女丁勝都刀米賣、年肆拾壹歲	丁女
女丁勝伊豆彌賣、年參拾漆歲	丁女、上件三口先嫡女
女丁勝與曾布賣、年貳拾歲	次女
女丁勝刀彌賣、年漆歲	小女
女丁勝母呂賣、年伍歲	小女、上件三口今嫡女
妹丁勝柿賣、年陸拾歲	丁女
從子丁勝宇奈麻呂、年肆拾參歲	正丁
妻秦部棕賣、年肆拾伍歲	丁妻
妾丁勝波太賣、年參拾貳歲	丁妾
男丁勝犬手、年拾漆歲	少丁、嫡子先嫡男
男丁勝麻呂、年貳歲	綠兒、妾男
女丁勝與理賣、年貳拾貳歲	丁女、今嫡女
女丁勝黑賣、年捌歲	小女
女丁勝小廣賣、年肆歲	小女、上件二口妾女
弟丁勝惠萬、年參拾陸歲	兵士
妻秦部廣賣、年參拾貳歲	丁妻
男丁勝龍、年拾壹歲	小子、嫡子

古事記と儒家を主とした中國思想の關係交渉について

男丁勝羊、年捌歳

小子

男丁勝宇提、年壹歳

縁兒、上件二口嫡弟

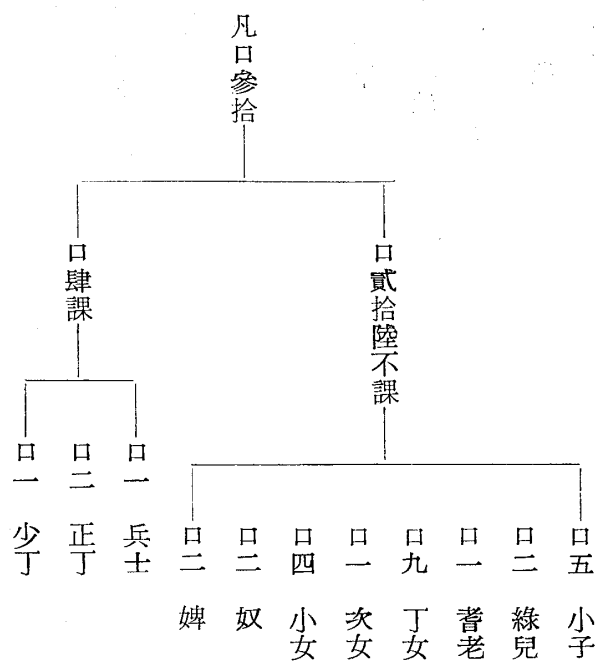
奴宇提、年拾貳歳

奴鳥麻呂、年肆歳

婢龍賣、年肆拾貳歳

婢宇提賣、年拾肆歳

上件四、戸主奴婢



いま右の豊前國仲津郡丁里の戸籍のうち十五戸についての人口状態を調べてみると

戸主丁勝馬手	1	1	1	2	1	1	2	老夫	課
戸主丁勝長兄	2	1	1	1	1	1	1	兵士	
戸主秦部長日	1	2	10	2	5	5	3	正丁	
戸主秦部平麻呂	3	2	3	2	5	3	4	少丁	
戸主秦部小人	3	2	1	1	1	1	1	残疾	
戸主秦部百江	3	2	1	2	1	1	1	耆老	不課
戸主秦部羊	1	1	1	1	1	1	1	小子	
戸主古溝勝刀留	3	2	11	1	7	6	5	緑兒	
戸主狹度勝大海	1	1	1	1	2	2	2	篤疾	
戸主秦部彌豆麻呂	1	1	1	1	1	1	1	癰疾	
戸主秦部阿邇	1	1	1	1	1	1	1	老妻	
戸主狹度勝泥麻呂	1	2	6	2	3	2	2	丁妻	
戸主狹度勝手手	1	2	1	2	1	2	1	丁妾	
戸主秦部根麻呂	1	8	4	4	9	6	4	丁女	
戸主丁勝刀牟	1	1	1	1	1	1	1	次妻	
	1	1	1	1	1	1	1	老女	
	1	1	2	1	2	1	1	次女	
	6	2	8	3	2	10	3	小女	
	1	1	3	1	3	4	8	緑女	
	2	1	1	1	1	1	1	耆女	
	15	2	2	2	2	2	2	奴婢	
	6	1	1	1	1	1	1	婢	

といふやうになつてゐる。これで見ると、奴婢を所有する戸數は却つて稀である。

實は右に擧げて來た戸籍や統計は、古事記の撰述前後のものではあるが、大寶令以後のもので、古事記の中・下巻に見える社會のものでは

ない。しかも天武天皇の四年には部曲解放の詔書も出てゐるので、古事記自體の時代と社會を考へるのには、妥當ではないが、古事記自體は同時に古事記撰述者の創作意識に重大な關係があるところから、従つて古事記撰述者の生存時代の社會を知つてゐることも必要であるので、右にあげたわけである。

今日残つてゐる戸籍簿は、前述したやうにすべて庶民のものであつて、當時の貴族階級のものは見られない。然るに庶民は貴族や豪族と奴隸との中間に位してゐた半自由民で、十七歳以上の男子は、庸・調・徭役の義務があつた。しかして、その庸・調・徭役を収めるところは天皇家であつた。もともとは天皇家の奴隸である部曲の民であつたかもしれないが、古事記の撰述された時分には、天皇家は既に、その部曲の民の大部分を解放して、庶民として半自由民の待遇を與へ、擔税の義務を負はせてゐたと思ふ。

かうした一般庶民の家に奴隸がゐなかつたのは、必ずしも當時の社會が奴隸社會でなかつたことを裏書きするものだと思つてしまふことは出来ない。半自由民であるから、その實力の有無によつて、奴隸をもつことも出来ぬことはないが、これ等の庶民の多くは、さうした實力をもたなかつたであらう。これは各戸の戸籍簿に見られるやうに、耕作地の廣狹と勞働力とは大體均衡を保つてゐたやうに思はれる。

しかるに當時の社會には、なほ天皇家からの庸・調・徭役の義務を免れてゐる所謂不課人口が相當澤山あつた筈である。例へば、天皇家の親族、八位以上の有位者、五位以上の子、三位以上の父・祖・兄弟・子・孫等、つまり當時の貴族階級である。

例へば前述の針間國の志自牟の如きは、貴族ではないが生活の豊かな地方の豪族であつたと思はれる。だからこの針間の國の宰として赴任した山部連小楯は、志自牟の家の新築祝にまねかれたものである。さうした庶民の家でも豪族では奴隸を使つてゐたので、意富祁王と袁祁王は、ここに馬甘・牛甘として奴隸に身を隠してゐたのである。馬甘・牛甘が豪家では奴隸の仕事であつたことは、前に意富祁王と袁祁王との食糧を奪つた山代の猪甘が面黥をした老人であつたことでも知られる。面黥をしてゐたからには刑餘の奴隸であつたことが知られる。

上宮太子にしても、多くの私有財産を所有してゐたであらう。さうした私有財産の管理と收穫には、奴隸を使つてゐたに違ひない。日本書紀の推古天皇十四年七月に、天皇は上宮太子に勝鬘經を講ぜしめ、また法華經を講ぜしめ、天皇はことごとく感心して、播磨國の水田百町歩を、上宮太子に贈與したとある。ところが上宮太子は、この百町歩の水田を斑鳩寺に寄進してゐる。當時百町歩の水田と言へば、相當な資産

であつたであらうが、上宮太子がこれを信仰する寺院に寄進したについては、勿論信仰が厚かつたといふこともあるが、同時に自分の家の經濟に、その百町歩の水田を必要としなかつたわけである。さうすると上宮家には、既に相當の私財が蓄積されてゐたことが想像せられる。その私財は、大部分が田地であつたであらう。聖德太子傳曆によれば、「用明天皇二年七月、三小將軍直入大連家、子孫資財田宅、皆爲寺分」とあるところに、太子傳注本願緣起を援いて、

「子孫・從類二百七十三人、爲寺永奴婢、沒官所領田園拾捌萬陸仟陸仟玖拾代、定寺永財、云々」

とある。この從類といふのは、もともとから奴隸であつたと思ふ。その奴婢と子孫とを皆寺の永奴隸としたとある。

物部氏や蘇我氏や後の藤原氏がどれだけ多くの私有地や私財をもつてゐたか、はつきりさせることは出来ない。しかもそれは時代によつて増加したり減少したりして一定してはゐなかつたであらうが、兎に角、古代において貴族豪族が、天皇家について、多くの土地と財産とを所有してゐたであらうことは想像される。

日本書紀の皇極天皇三年十一月の條に

「蘇我大臣蝦蟇兒入鹿臣、雙起家於甘櫛岡、稱大臣家曰宮門、入鹿家曰谷宮門、稱男女曰王子、家外作城柵、門傍作兵庫、每門置盛水舟一、木鉤數十、以備火災、恒使力人持兵守家、大臣使長直於大丹穗山、造梓削寺、更起家於畝傍山東、穿池爲城、起庫儲箭、恒將五十兵士、繞身出入、名健人曰東方儼從者、氏氏人等入侍其門、名曰祖子孺者、漢直等全侍二門」

とあるが、これだけ驕を極めた豪奢な生活が出来るについては、天皇家の租稅收入の中から多額の俸祿を横奪したであらうが、そればかりではあるまい。必ずや夥多の私財、それは廣大な土地を所有してゐたであらう。しからば、さうした廣大な土地の管理運営をするものがなくてはならない。しかも蘇我氏には東方儼從者とか祖子孺者とか名づける直屬の臣下が多數あつた。これ等の多數の臣下を養ふについてもまた夥しい私財を必要としたであらう。さうした多數の人々を養ふ實際の生産者は、私の奴隸であつたに違ひない。

かうした高級貴族の私有財産の所有は、獨り蘇我氏にだけの特別のものであつたといふことは出来まい。物部氏でも蘇我氏でもその他多くの豪族は、皆それぞれに私財をもち廣大な土地を私有してゐたであらう。さうした私財を管理し、廣大な土地を耕作して收穫をあげるのは誰

であつたであらう。それはこれ等の貴族や豪族の直接たづさはるところではない。多くの奴隸がまた私財として養はれてゐたことが想像される。

大化元年の詔には

「自古以降、每天皇時、置標代民、垂名於後、其臣連等伴造國造、各置己民、恣情驅使、又割國縣山海林野池田、以爲己財、爭戰不已、或者兼并數萬頃田、或者全無容針少地、及進調賦時、其臣連伴造等、先自收斂、然後分進、脩治宮殿、築造園陵、各率己民、隨事而作……方今百姓猶乏、而有勢者分割水陸、以爲私地、賣與百姓、年索其價、從今以後、不得賣地、勿妄作主兼并劣弱」

とあり、即ち、臣、連等伴造、國造が各々己が民を置き、恣情にこれを驅使し、また國縣の山海林野池田を割き配り、その私財として爭奪し、有力な貴族豪族たちは、數萬頃の土地を兼併し、一方では全く針を容れるばかりの僅かな土地も無いといふ有様で、調賦の際は、臣連等は先づ自ら收領し、宮殿園陵をつくり、各その民を率ゐて事に従ふ様子であつた。ここに恣情に驅使される民といへば、それは奴隸のことであつたと言つてよからう。このことは、天皇家の土地と貴族豪族の土地とを除けば、日本の天下にはいくらかも土地は無かつたことを示してゐる。

これよりさき、上宮太子が憲法十七條を制定した意圖は、當時の貴族たちが綱紀を紊亂してゐるのを肅正せんとするがためであつた。十七條憲法は條々すべてさうした意圖のもとに編成されたのであるが、殊にその第三條には、

「承詔必謹、君則天之、臣則地之、天覆地載、四時順行、方氣得通、地欲覆天、則致壞耳、是以君言、臣承、上行、下靡、政承詔必慎、不謹自敗」

とあり、第八條には

「群卿百寮、早朝晏過、公事靡盬、終日難盡、是以遲朝、不逮于急、早退、必事不盡」

といひ、第十二條には

「國司、國造、勿斂百姓、國非二君、民無兩主、率土兆民、以王爲主、所任官司、皆是王臣、何敢與公、賦斂百姓」

とある。これ等はその一端であるが、十七條すべてに亘つて、王を尊敬すること、その反面に當時の貴族官僚を抑壓する意が見えてゐる。か

うした貴族官僚の服務規定を制せなければならなかつた裏面に、當時の貴族・官僚が如何に私財を蓄へ横暴を極めてゐたかを物語るものがある。かうした貴族官僚の横暴は、一般人民を奴隸化しなければならなかつた。

かうした上宮太子の十七條憲法の折角の制定にもかかはらず、現實の社會には効果をあらはさなかつた。蘇我氏のやうな貴族・官僚は愈々、その横暴の度をつのるばかりであつた。そこでまた大化の改新へと事態は進展した。大化改新も、十七條憲法の制定も、その意圖する根本に相違はなかつた。共に天皇家を中心にして萬民を一視一體として、天皇家に奉仕せしめんといふ形のものではあるが、十七條憲法の制定が實効を社會に及ぼさなかつたと同様に、大化改新もまたその形式は整備されたが、實効を社會にもたらすまでにはいたらなかつた。

皇極天皇の四年六月、官規を亂してゐる元兇蘇我蝦夷と入鹿父子は殺され、皇極天皇退位、孝德天皇即位、中大兄皇子を皇太子とし、官僚の入替へを行ひ、大化二年の詔には、

「其一曰、罷昔在天皇等所立子代之民、處々屯倉、及別臣連伴造國造村首所有部曲之民、處々田莊、仍賜食封大夫以上、各有差、降以布帛賜官人百姓有差、又曰、大夫所使治民也、能盡其治、則民賴之、故重其祿、所以爲民也」

とある。即ち、國の土地人民の私有を禁止し、品部・部曲の民の制度と、その私有地即ち田莊を廢止し、各官僚には食封を賜つた。この食封といふのは、戸數を定めて、そこから入る康調を賜はるのである。かうした革新政治は形式的には紊亂した政治を一應整備したわけであるが、それは結局一時的なことであつて、決して長くは續かなかつた。従つて實際の効果を社會に對して果し得なかつた。

大化二年の詔が發せられてから、僅かに十八年の後、即ち天智天皇の三年に、再び民部・家部等の部曲を設定したことが、日本書紀に見えてゐる。

「三年春二月己卯朔丁亥、天皇（天智）命大皇弟、宣增換冠、倍位階名、及氏上民部家部事……其伴造等之氏上、賜干楯弓矢、亦定其民部・家部」

かうして部曲は再度正式に認容されることになつたが、これも暫時のことであつて、それから僅かに十二年の後、即ち天武天皇の四年には、部曲はまたまた解放されたことが、日本書紀に見えてゐる。

「四年……二月乙亥朔……己丑、詔曰、甲子年（天智天皇三年）諸氏被給部曲者、自今以後除之、又親王諸王及諸臣、并諸寺等所賜、山澤島浦、林野陂池、前後並除焉」

しかし、この天武天皇の部曲禁除令が、その後嚴重に勵行されたかどうかは、頗る疑はしい。天武天皇の四年から八十年程後の天平勝寶七年に麻績部などといふ部曲があつたことが、萬葉集の卷二十に見えてゐる。

「天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌

具爾具爾乃、佐伎毛利都度比、布奈能里氏、和可流乎美禰婆、伊刀母須弊奈之

右一首、河内郡、上丁神麻績部島麿」

とか、

「天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌

爾波奈加能、阿須波乃可美爾、古志波佐之、阿例波伊波々牟、加倍理久麻氏爾

右一首帳丁若麻績部諸人」

しかし平安朝時代ともなると、その昔の部曲も、すっかり自由民となつたばかりか、貴族となつてゐるものも見られる。日本逸史の桓武天皇の條には

「延暦二十二年三月乙丑、右京人正六位上忌部宿禰濱成等、改忌部爲齋部」

とあり、また三代實錄の清和天皇の條には

「貞觀十一年十月二十九日癸丑晦、神祇大祐、正六位上忌部宿禰高善、改忌部爲齋部、其先出自高御魂命也」

とある。これは部曲が解放された後の現象であつて、この論文には強ひて論及する必要はないことであるが、ここに一言つけ加へておく。

このことはさて置き、上述したやうに大化改新によつて一度部曲は廢止され、解放されたが、その後設置・廢止を繰返して、一定しなかつたのには、それだけのわけがあつたに違ひない。そのことは後に中國の思想や學問の受容の態度と關聯して、考察するであらうから、ここで

は詳かく觸れないことにするが、一言すれば要するに當時の日本の社會が、奴隸を廢止して落着ける社會ではなく、いまだ奴隸制社會の進行中であつて、奴隸を生産の重大な要素としての經濟社會であつたからである。上宮太子や大化改新は、人民をすべて一視一體に天皇家に隸屬せしめ、天皇を専制君主としてその下に人民を平等にしようとした。貴族官僚は別として、一般人民の間で上下關係を認めない、進歩的な考へ方であつたが、かうした進歩的な考へ方の入れられる中世的社會にまで、當時の社會は進んでゐなかつた。それがために上宮太子の十七條憲法も、大化改新の諸制度も、社會的な効果をもたらさずに、觀念的な思想や形式的な制度として、社會からは浮いてしまつたわけである。蘇我氏に替つた藤原の鎌子の一族が、やがては實質的に蘇我氏と同じやうな政治經濟的な地位に立ち、形式的な新制度を破壊してしまふことになつた。そればかりではなく源平兩氏が擡頭して、これが私兵を養ひ私有地を持ち、奴隸制社會の末期的な症狀を深刻に露呈することになつて來るのである。

聖武天皇の天平十五年（七四三）に奈良に東大寺が建立されたが、それから數年後天平勝寶年間には、この東大寺に數百人の奴隸が、寺の財産として豪族から獻上されたり、また買入れたりしてゐることが、群書類從卷五一二、雜部に、東大寺奴婢籍帳として記錄されてゐる。天皇家の勅願によつて建立された東大寺であるから、天皇家からの援助によつて寺院の經濟的基礎は確立してゐたであらうが、それだけにまた多額の私の寺有財産をも所有してゐたと思ふ。さうした私の寺有財産を管理させ収益させるためには、多數の人手を要したであらうことも想像にかたくない。慈愛の徳の深い筈の寺院ではあるが、それが奴婢を收容して酷使してゐるといふところに、時代の特色がある。封建社會であれば、農奴は庶民として當然のあるべき相と、社會が承認してゐたであらうが、それと同じやうに奴隸社會においては、奴隸は當然被支配者としてのあるべき相と、社會は認めてゐたであらう。故に元來慈愛深い筈の寺僧でも當時の社會通念に従つて、寺院の經濟的基礎として、奴隸を酷使しても別に慈愛に反するものとは考へなかつたであらう。寺僧でさへも人間を奴隸と認めて不思議に思はなかつたとすれば、ましてや一般の貴族官僚が、人間を奴隸視しても、そこに何の不思議をも覺えなかつたであらう。

東大寺の奴婢文書四十六通の外に、なほ觀世音寺文書三通といふのもある。この觀世音文書といふのは、筑紫の觀世音寺の奴婢に關する記錄で、觀世音寺の稻をあづかつてゐた三家連息嶋が、稻の代りとして奴婢を寺に寄進した文書である。

孝謙天皇の天平勝寶七年に、宇佐八幡の大神の神託が下つて、かねて朝廷から賜はつてゐる千四百の封戸と一百四十町歩の水田が、無用であるから返還せよとのことで、神宣によつて返還するとの申し出があつたことが、續日本紀に出てゐる。

「丁亥、八幡大神託宣曰、神吾不願矯託神命、請取封一千四百戸、田一百卅町、徒无所用、如捨山野、宜奉返朝廷、唯留常神田耳、依神宣行之」

これが如何なる理由によつて、宇佐八幡の大神がそんな神託をしたか明かでないが、それから十數年後、稱徳天皇の神護景雲三年（七六九年）に大宰の主神習宜阿曾麻呂が道鏡に媚び、宇佐八幡の神勅といつはり、道鏡を皇位に卽かしめれば、天下太平ならんと申出たところなどから考へて見ると、勿論天平勝寶七年の封戸水田返上願ひもその申し出での人は違ふが、それが果して純真なものであつたか否かは疑はしいと思ふ。千四百の封戸と水田百四十町歩とは返還しても唯常の神田だけは保留したいといふところに、相當廣大な神田が確保されてゐたのはなからうかとの疑念をもたれないことはない。

續日本紀によれば、淳仁天皇の天平寶字二年九月には

「常陸國鹿島神奴二百十八人、便爲神戸」

とあり、また稱徳天皇の神護景雲元年四月には

「放鹿島神賤男八十人女七十五人、從良」

とあり、光仁天皇の寶龜十一年十二月には

「常陸國言、脫漏神賤七百七十四人、請編神戸、許之、但神司妄認良民、規爲神賤、假詫靈異、已侵朝章、自今以後、更莫申請」

とある。右の數例は、神社もまた奴隸を所有してゐたことを示すものである。寺院と同様に神社もまたその私財の管理収益のために、奴隸をもたなければならなかつたであらう。

自由民と奴婢との間に生れた子供のことが、日本書紀や續日本紀などでしきりに問題になつてゐる。ここに日本書紀の例をあげれば、孝徳天皇の大化元年（六四五）八月の詔に

「又男女之法者、良男良女共所生子配其父、若良男娶婢所生子配其母、若良女嫁奴所生子配其父、若兩家奴婢所生子配其母、若寺家仕丁之子者、如良人法、若別入奴婢者、如奴婢法」

とあつて、自由民間に生れた子供は父につけ、自由民の男と婢との間の子供は婢につけ賤民とし、自由民の女と奴との間の子供は父につけ賤民とし、奴婢の間に生れた子は母につけ賤民とするとあつて、要するに自由民と奴隷との間に生れた子供はすべて奴隷とされた。

ところが、それから約百四十年後の桓武天皇の延暦八年五月の太政官の奏言によれば、續日本紀では

「謹案令條、良賤通婚、明立禁制、而天下士女、及冠蓋子弟等、或貪艷色而奸婢、或挾淫奔而通奴、遂使氏族之胤沒爲賤隸、公民之徒變作奴婢、不革其弊、何導迷方、臣等所望、自今以後、婢之通良、良之嫁奴、所生之子、並聽從良、其寺社之賤如有此類、亦准上例、放爲良人、伏望、布此寬恩、拯彼泥滓、臣等愚管、不敢不奏、伏聽天裁、奏可之」

とあつて自由民と奴婢との間に生れた子は、すべて自由民とするといふことになつてゐる。

かやうに自由民と奴隷との結合關係が問題とされるといふ裏に、奴隷の數が當時相當數に上つてゐたことを、暗示するものがあると思ふ。奴婢の數が極く僅少で、自由民の數が絶對多數である場合には、かうした問題がさううるさく起ることはあるまい。

これを要するに、古事記の撰述された奈良朝時代や、それ以前の古事記の中・下卷に出て來る時代は、氏族制度によつて人間關係が結ばれてゐたが、さうした社會の人間生活を充足してゐた經濟的基盤は、奴隷にあつたと思ふ。當時の社會階級は、天皇家を中心とした貴族の階級があり、その下に一種の奴隷である部曲があり、その他に豪族や自由民があり、更に奴隷なる不自由民の階級があつた。天皇家は別として、その他の自由民の階級である多くの貴族や豪族は、氏と姓とを有つてゐた。一種の奴隷である部民は、氏の上に隸屬する氏の子であるから氏はあつたが、姓はなかつた。この部民のうちには、天皇家に直屬してゐるものを品部といひ、その他の貴族や豪族に屬してゐるものを部曲といつた。貴族や豪族は、生産的勞働には、全然たづさはることなく、品部や部曲は職業的服務者であつた。古代史の表面に、常に出て來るのは貴族と一種の奴隷である部民とであるが、所謂奴隷の活躍は文字の上では見られない。奴隷は全然人格を認められることなく、牛馬貨財に等しい存在であるから、勿論賣買贈與の對象にもなつた。大寶令の關市令には

「凡賣奴婢、皆經本部官司、取保證、立券付價」

とあり、東大寺の奴婢籍帳によれば、天平十八年に奴四人と婢一人とを、稻五千束で、天平十九年に婢二人を、稻一千二百束で、天平廿年に奴一人と婢三人とを、錢廿貫で、天平勝寶元年に婢一人を、十貫で、賣買したといふ記録がある。かうした奴婢の活躍は、歴史上に出て來なかつたからとて、それが存在しなかつたとも、また活躍の場がなかつたとも考へられない。上に縷述して來たやうに、古代においては相當數の奴隸が存在してゐたことが、歴史の隅々に見られるからには、それ等の奴隸が、社會上相當に職業を分擔して、それが主要生産の重要部分の勞作を果して來たであらうことが想像される。かうした觀點から、日本の古代社會も、その構造は奴隸制社會であつたと見てよいと思ふ。

ただ古事記撰述以前の日本の場合は、賣買の對象となり、また財産勘定に入れられる奴隸の外に、部民といはれる一種の奴隸が、貴族や豪族と一般奴隸との間に介在してゐたところに、日本の古代の奴隸制社會の一つの特徴があると思ふ。かうした一種の奴隸である部民が介在することによつて、しかもこの部民の活躍が古文書において相當目を惹くところから、日本には古來から純粹の奴隸制社會はなかつたと見るが如きは、正しい觀方ではないと思ふ。部民の數の上の統計も、經濟上の効果についての統計もないことは、奴隸のそれ等のないことと同様であつて、さうした點を文献上から實證することは出來ない。何れにしても、不完全な統計や、斷片的な古文書の記録から、臆測をたくましくして推定する外に道はない。

次には今日見る、日本へも傳來した儒家の經書の成立した漢代が、世界史的に見て古代社會であつたか、それとも中世に入つてゐたかについて、種々の異見があつて、今日もまだ定説を得てゐない。しかるに漢の時代は、儒家の經書の成立と重大な關係があるので、厄介なことだが、これも一應考察して、漢代がどんな社會様相をしてゐたかを、決めてかからないことには、論をすすめることが出來ない。

郭沫若は、その舊著「中國古代社會研究」において、中國社會の歴史的發展段階として、殷以前は無階級の原始共產制の氏族社會であつたが、西周時代から身分的階級が発生し、西周時代は貴族と庶民と臣僕奴隸をもつた奴隸社會とし、春秋戰國から秦漢魏晉六朝隋唐五代宋元明清の末までを、官僚と人民、地主と農夫、師傅と徒弟との對立する封建社會となし、清末から最近百年間を帝國主義と弱小民族、資本家と無産者の最後形態的階級對立を含んだ、資本制社會となす。このことを次のやうに表示してゐる。

(時代)	(社會形態)	(組織成分)	(階級性)
(一)西周以前	原始共產制	氏族社會……………	無階級
(二)西周時代	奴隸制	王侯百姓(貴族) 庶民臣僕奴隸	身分的階級
(三)春秋以後	封建制	官僚 地主 農民 師傳 徒弟	身分的階級
四最近百年	資本制	帝國主義 資本家 無產者	最後形態的階級對立

右の表において、(一)は西周時代であるから、(二)の西周以前とあるのは西周は含まず、一般的には殷以前と言ふべきところであらう。
 なほ郭沫若は、右のやうな社會變遷の結果、中國社會は三回の社會革命と文化革命とを経験してゐるといふ。第一次は殷周の間に行はれた奴隸制的革命であつて、これに應ずる文化革命は、詩書易の諸書を反映してゐるとなし、第二次は周秦の際に行はれた封建制的革命で、これに應ずる文化革命は、儒道墨の諸家の反映であり、第三次は滿清末年に行はれた資本制的革命で、これに應ずる文化革命は科學的輸入によつて反映してゐる。

右の中國の社會革命を表示して郭沫若は次のやうに記してゐる。

第一次	奴隸制的革命	殷周之際	詩書易諸書
第二次	封建制的革命	周秦之際	儒道墨諸家
第三次	資本制的革命	滿清末年	科學的輸入

郭沫若が西周時代を奴隸制社會と見る根據は、周王朝が多數の奴隸を使用し、大いに土木工事を興し、土地を開拓し、徭役征戰を行つたことから知られるとなす。即ち今文尚書の牧誓から文侯之命に至る周書十七篇中の八篇は、専ら殷人を對象としての話であつて、この中で周公は殷人を目して蠢殷とか戎殷とか庶殷とか殷の頑民とか言つて罵つてゐるし、なほさうした庶殷を徵發して洛邑を營作し、種々と嚴厲な言葉

で、彼等を恫喝してゐるが、かうしたことは被征服民族が、奴隸として使用されたことを表明してゐるのではなからうかと、郭沫若は言ひ、なほ左傳の定公四年に「魯公に殷民六族、條氏徐氏蕭氏索氏長勺氏尾勺氏を分ち、康叔に殷民七族、陶氏施氏繁氏錡氏饑氏終葵氏を與へた」とあるが、これは殷民を奴隸としたことを明言するものであつて、この外に臣に民人を僕として錫うたことが、古代の金文に澤山見られるとつけ加へてゐる。

「我們在書經詩經裏面、不可以看見他使用着多量的奴隸來大興工木、開闢土地、供徭役征戰嗎、

周書の十七篇中（自牧誓至文侯之命的十七篇）有八篇、便是專門對付殷人說的話（本文中所謂尙書、係據今文的二十九篇）我們看那周公罵殷人是蠢殷戎殷庶殷、或者說殷之頑民、而且把那些庶殷徵發來作洛邑、用種種嚴厲的話去恫喝他們、那不完全表示着把被征服了的民族當成奴隸使用嗎、

案、左氏定四年傳言、分魯公以殷民六族、條氏徐氏蕭氏索氏長勺氏尾勺氏、與康叔以殷民七族、陶氏施氏繁氏錡氏饑氏終葵氏、此明言以殷人爲奴、此外錫臣僕民人之事、於古金中甚多、云々」

更にまた郭沫若は、當時の階級を二つに分け、一は君子、一は小人となし、君子は百姓ともいひ、當時の貴族階級であるが、小人は民とか庶民とか黎民とかいひ、これは奴隸であつたといふ。この奴隸は平時は主として農業労働や職人の仕事に従事し、いざ戦争となると兵卒や人夫として徵發されるものであり、從つて西周の社會は恰も古代ギリシャ、ローマと同様に純粹なる奴隸制の國家であつたと、右の書で彼はいふ。なほ彼は當時の奴隸酷使のさまを詩經の詩に見出すといひ、大雅の蕩之什、雲漢の詩や桑柔の詩を引いて説明してゐる。

「本來當時的階級的構成是分成君子和小人的、君子又叫作百姓、便是當時貴族、小人又叫作民庶民黎民群黎、實際就是當時的奴隸……他們在平時、做農夫百工、在戰時就當兵當夫、這在大雅和小雅的各詩中、敘述得最爲明白、竝且如像

周餘黎民、靡有孑遺（雲漢）

民靡有黎、具禍以燼（桑柔）

我們從這些話上看來、可以知道當時的奴隸是怎樣受着虐待了（中略）

所以我們在這一節的推論裏面、所得出的結論是、中國社會在西周的時候、剛好如古代的希臘羅馬一樣是一個純粹的奴隸制的國家」。

ところが中國は周室の東遷以後即ち東周となると、封建制社會になつたと郭沫若は見えて、その論據を右の書で、次のやうに説明してゐる。

周の穆王時代が奴隸制の最盛期で、この穆王が作つたといはれる呂刑に、金錢で贖罪が出来るやうな制度を設けてゐるが、これは奴隸解放の第一歩であり、奴隸も荒地の開墾や遠征中に私産を製造する機會を得て、刑戮を買贖することが出来たのである。しかしこれは經濟的に解放されたものであつて、やがてそれは政治的法律的に解放されることになる。それは周の厲王の十二年に發生した首都の暴動で、民衆が厲王を追出し、王宮を包圍し、皇太子を殺さうとしたが、召公が自分の子を身替りにして皇太子を助け、民衆は共伯和を迎へて皇帝としたが、十四年の後に召公等が宣王を立てた。この革命が中國有史以來の始めての平民暴動で、フランスのパリ・コムミュンやソ聯の十月革命にも劣るものでない。これで奴隸の主人公たる周室は、宗主としての權威を失ひ、東周時代の詩經の中には、無數の變風變雅の制作が見られる。これは實質的には、經濟社會の變革、社會階級の動搖、革命思想の勃興を表明したものである。

その時分に富人階級が發生し、所謂東周以來、管仲が罪隸から身を起し、甯戚が牧豎から身を起し、百里奚が乞丐から身を起し、商人の弦高が軍國の大事を預ることになつたのであるが、これは事實上の證明ではなからうか。世卿制が逐漸廢除せられ、白衣が卿相になつたのは、奴隸制社會では絕對にあり得ないことである。

事實上、周王室が東遷以後、中國社會は奴隸制度から、眞の封建制度に轉入し、それ以後農業方面にあつては、地主と農夫との對立した莊園制的生産、商工業方面にあつては、師傅と徒弟との對立した、行幫制が出現した。春秋の五霸、戰國の七雄は、眞正の封建諸侯である。

秦が天下を統一して以後、名目上では封建を廢して郡縣となしたけれども、實質的には封建制度が、最近百年前までは、巍然として續いてゐたのである。

このことを郭沫若は「中國古代社會研究」では、次のやうに述べてゐる。

「奴隸制最盛の時期、是在周穆王的時候、現在不能够盡情的敘述、但在周穆王末年、也就漸漸的衰落下來了、書經上周穆王所做的『呂刑』便設出了以錢贖罪的制度、這換一句話設、就是奴隸的解放的表現、

奴隸在開墾一切的荒土中、在使用爲兵士向四方征服中、逐漸的得到自行製造私產的機會、所以奴隸也富庶到有錢來可以買賄刑戮、這是很重要的一个關鍵、

奴隸在經濟上、已經逐漸的得到解放、但政治法律上、仍然沒有得到解放、這必然的要激起一個社會革命中的挿話的政治革命、這個革命、便表現在周厲王的十二年、那時候首都起了暴動、庶民起來把厲王趕跑了、還圍着他的王宮、要殺他的兒子宣王、是召公把自己的兒子拿出來替了死、周厲王跑了之後、一般的人去歡迎共伯和來做皇帝、他做了十四年的皇帝、後來終竟被復辟派的周召二公把他推翻了、這次的革命、我們可以說是中國有史後的第一次的平民暴動、在那當時的激烈的情形、我們想來總不會是亞於法蘭西的巴黎暴動、和蘇俄的十月革命、（中略）

奴隸主人的周室完全失掉了他的宗主的權威、所以我們在東周前後在詩經中、可以看出無數的『變風』『變雅』的制作、那實質都是表明着當時的經濟基礎的變革、社會關係的動搖、革命思想的勃發、（中略）

東周以後、我們看、如像管仲起於罪隸、甯戚起於牧豎、百里奚起於乞丐、商人的弦高竟能干預軍國大事、不便是事實上的證明嗎、世卿制逐漸廢除、白衣可以爲卿相、這在奴隸制是絕對沒有的、（中略）

事實上周室東遷以後、中國的社會才由奴隸制轉入真正的封建制度、從那時以後、在農業方面、中國才有地主和農夫對立的莊園制的產生、在工商業方面、也才有師傅和徒弟對立的行幫制的出現、春秋的五伯、戰國的七雄、要那才是真正的封建諸侯、

後來在秦統一了天下以後、在名目上雖然是廢封建而爲郡縣、其實中國的封建制度、一直到最近百年、都是很巍然的存在着的」

これを要するに郭沫若の「中國古代社會研究」によれば、彼は殷代を原始共產制の社會、西周を奴隸制社會、春秋戰後から秦漢を経て清末近百年前までを封建社會として區分してゐた。

ところが彼は一九五四年に「奴隸制時代」といふ一書を公にした。それによると、郭沫若は

「殷墟其後在一九二八年開始了科學的發掘、抗日戰爭中發掘工作雖然中斷了、但自中華人民共和國成立以來、又由中國科學院在繼續進行着、經過這一長期的相當大規模的發掘的結果、發現了殷代的陵墓和宮室遺址中有大量的人殉、或者是得全首領的生殉、或者是身首異地的殺殉、

每一大墓的人殉有的多至三四百人、殉者每墓隨身帶有武器、這些驚人事跡的發現、足以證明殷代是有大量的奴隸存在的、更把甲骨文字和其他資料的研究參合起來、我們可以斷言、殷代確實是奴隸制社會了」

といひ、彼は殷代帝王の陵墓に生殉又は殺殉の殉死が多いところから、殷代を奴隸制社會と確認し、前の「中國古代社會研究」の説を變更してゐる。

従つて中國の奴隸制社會は殷に始まり西周に及び、その下限も「中國古代社會研究」の説を變へて「奴隸制時代」では、春秋と戰國との交としなし、史記の年代により、春秋時代の東周元王元年、即ち西曆紀元前四七五年をもつて、中國の奴隸制社會の末期としてゐる。従つてそれ以後の春秋時代六十年位は封建時代に入り、ずつと戰國秦漢と續いて行くことになつてゐる。

彼の「奴隸制時代」には、かうある。

「依據史記、把絕對的年代定在周元王元年、即公元前四七五年、在這之前的春秋作爲奴隸社會の末期、在這之後的戰國作爲封建制的初期」結局郭沫若は中國の奴隸制時代を殷から始まり西周を経て春秋後期まで及んでゐるものと見、春秋末から中國は封建制時代に入るものと認めてゐることになる。従つて漢代は封建制社會であることには前から變つてゐない。

さうして漢代が最早や所謂奴隸制社會でないこと、即ち封建社會であることについて、郭沫若は、「奴隸制時代」においても、縷々解説を試みてゐる。

「國內外學者、頗有人認爲、西漢也是奴隸社會的、有的甚至把西晉、把五代也都劃入奴隸社會、（中略）西漢已經不是奴隸社會了」郭沫若も西漢時代に奴隸がゐなかつたとは言はない。奴隸の存在は認めてゐる。

「西漢、不能否認、是有大量的奴隸存在、無論官家奴隸或私人奴隸、數量都很多」

といひ、史記の平準書及び漢書食貨志を引き、漢武帝が緡錢令を行つたとき、富商の徵稅に應じないものを告發し、御史・廷尉・正監・分曹を分遣して調査せしめたところ

「得民財物以億計、奴婢以千萬數、田、大縣數百頃、小縣百餘頃、宅亦如之、於是商賈中家以上大率破」（史記・平準書）

とあり、

「其没入奴婢、分諸苑養狗馬禽獸及與諸官、官益雜置多、徒奴婢衆、而下河漕度四百萬石、及官自糴、乃足」(漢書食貨志)

とあり、これをもつて見れば、當時私家と官家の奴隸は少くはなく、漢書の貢禹傳には

「諸官奴婢十萬餘人、戲游無事、稅良民以給之、歲費五六鉅萬」

とあり、漢書の景帝紀の註に如淳が漢儀注を引いて

「太僕、牧師諸苑三十六所、分布北邊西邊、以郎爲苑監、官奴婢三萬人、養馬三十萬匹」

とあり、また漢書の百官公卿表上を引いて

「司隸校尉——漢武征和四年(公元前八九年)初置、持節、從中都官徒千二百人」

とあり、また孫星衍集漢舊儀補遺と太平御覽二二九に引いた漢舊儀とを引いて

「太官主飲酒、皆令丞治、大官、湯官奴婢各三千人」

と、「奴隸制時代」には引用してゐる。

郭沫若は、さらに漢代にかうした官奴婢の多數であつたわけを説明して、朝廷が臣下に奴婢を賞賜したがためであるといひ、漢書の外戚傳を引き、漢の武帝が異父姉脩成君に賞賜して

「錢千萬、奴婢三百人、公田百頃、甲第」

といひ、また武帝は三十八年に

「以二千戶封地士將軍(欒)大爲樂通侯、賜列侯甲第、童千人」

と、漢書の郊祀志を引き、また漢宣帝即位二年(公元前七三年)將軍霍光に賞賜して、

「前後黃金七十斤、錢六千萬、雜繒三萬匹、奴婢百七十人、馬二千匹、甲第一區」

と、漢書の霍光傳にあるを引き、また甘露三年(公元五三年)に

「公主與烏孫男女三人、俱來至京……（宣帝）賜以公主田宅奴婢、奉養甚厚」

と漢書の西域傳にあるのを引いてゐる。

貴族や官僚以外にも富商大賈が多數の私奴婢を蓄へてゐたことは、前の告緡令の實施の時にあげたが、なほその他に漢書の司馬相如傳によれば

「卓王孫僮客八百人（史記・貨殖傳作千人）、程鄭亦數百人」

とあり、また卓王孫は司馬相如のもとへ奔つた文君に

「卓王孫不得已、分與文君僮百人、錢百萬」

とあり、また司馬相如が文學者として文壇に出てから

「厚分與其女財、與男等」

とあるのを引いて、一般の富家も私奴を蓄へてゐたことを述べてゐる。

かやうに漢代には多數の官私の奴婢がゐたので、哀帝の時に輔政の師丹、丞相孔光、大司空何武等が奴婢と田産の制限を主張して、辦法が定められたことがあるとし、食貨志に

「諸侯王・列侯、皆得名田國中、列侯在長安、公主、名田縣道、及關內侯、吏、民、名田、皆毋過三十頃、諸侯王奴婢二百人、列侯、公主、百人、關內侯、吏、民、三十人、期盡三年、犯者沒入官」

とあるといひ、但しこれは丁傳等に反對され實施されなかつたことを併せ引いてゐる。

また西漢時代に奴婢は賣買の對象となつたもので、その價格は個々に違ふが、奴隸一人の價格が一萬錢から二萬錢位のものであつて、このことを、太平御覽四一一引劉向孝子圖に

「前漢董永千乘人、少失母、獨養父、父亡、無以葬、乃從人貸錢一萬、永謂錢主曰『後若無錢還君、當以身作奴』」
とあるを引き、また王褒僮約の古文苑に

「神爵（公元五九）正月十五日、資中男子王子淵、從成都安志里女子楊惠、買（亡）夫時戶下髡奴便了、決價萬五千」とあるを引用してゐる。

このやうに西漢では官私奴婢は多數に存在し、しかもそれが多く生産に従事し、家畜と同様に賣買の對象になり、しかもまたこれを屠殺すること——この奴婢屠殺のことは、董仲舒が武帝に上書した疏の中に「去奴婢、除專殺之威」とあることでも知られる——も出來たので、かうした觀點から「不少的研究者便認西漢爲奴隸社會、這一看法、要說沒有根據、頗難令人心服、因此、要否認這一看法」と、郭沫若は言ひ、彼はそのことについて次のやうに反證をあげてゐる。

先づ第一に西漢時代には武帝以後は奴隸であるからとて、任意に屠殺することは許されなかつた。それには六項の例證があるとして、

「邵侯順、代共王子、天漢元年坐殺人及奴凡十六人、以捕匈奴千騎、免」（漢書王子侯表上）

「廣漢使所親信長安人爲丞相（魏相）府門卒、令微司（伺）丞相門內不法事、（宣帝）地節三年七月中、丞相傳婢有過、自絞死、廣漢聞之、疑丞相夫人妬殺之府舍……遂自將吏卒、突入丞相府、召其夫人跪庭下、受辭、收奴婢十餘人去、責以殺婢事、丞相魏相上書自陳、妻實不殺婢……、事下廷尉治實、丞相自以過譴咎傳婢、出至外第乃死、不如廣漢言（漢書・趙廣漢傳）

「將陵（侯）史子回、以宣帝大母家封爲侯……子回妻宜君、故成王孫、嫉妬、絞殺侍婢四十餘人、盜斷婦人初產子臂膝以爲媚道、爲人所上書言、論棄市、子回以外家故、不失侯」（史記建元以來侯者年表後褚先生補記）

「繆王元……薨（宣帝五鳳二年）、大鴻臚（王）禹奏、『元前以刃賊殺奴婢子男、殺謁者、爲刺史所舉奏、罪名明白、病、先令令能爲樂奴婢從死、迫脅自殺者凡十六人、暴虐不道、故春秋之義、誅君之子不宜立、元雖未伏誅、不宜立嗣』奏可、國除」（漢書・景十三王傳）

「（成帝）元延中、（梁王）立復以公事怨相掾及睢陽丞、使奴殺之、殺奴以減口、凡殺三人、傷五人、手毆郎吏二十餘人、上書不拜奏、謀篡死罪囚、有司請誅、上不忍、削立五縣」（漢書・文三王傳）

「莽杜門自守、其中子獲殺奴、莽切責獲、令自殺」（漢書・王莽傳）

以上の六例に見るやうに、漢武帝以後には、凡そ私家の奴隸は、王侯將相やその夫人公子と雖も、みだりに殺すことは出來ない。有罪の奴

婢を殺しても封爵を失ふことになる。この事例と董仲舒の諫疏とを對照してみると、容易に一つの判斷、それは漢武帝は董仲舒の諫言を採納し、奴隸の殺戮を嚴禁したと思はれる、が得られるが、史書には明文が無い。しかしこれは理の當然であつて、必然のことでもある。秦時にあつては、奴婢を殺すには官に報じなければならなかつたのに、それが漢初には奴婢を殺すことが出來たのは、一時の逆轉現象である、として次のやうに記してゐる。

「據這些例證看來、可以看出漢武帝末年以後、凡是私家奴婢、就是王侯將相及其夫人公子、都是不能夠擅殺的、殺了有罪、而且罪很大、要抵命、要失掉封爵、把這些事例和董仲舒的練疏對照起來、我們可以放心地下出一個判斷、漢武帝採納了董舒的練言、已把殺奴懸爲嚴禁、雖然史籍中沒有明文、這是理所當然、也是勢所必然的、……在秦時殺奴、都須得報官了、漢初可以專殺奴婢、只是一時性的逆轉」

さらに一項の重要な反證は、西漢の生産方式の主流がもはや奴隸制の方式でないことである、と郭沫若はいふ。「奴隸制時代」では

「再一項重要的反證、是西漢生産方式的主流、已經不是奴隸制」

とある。しかして西漢の奴婢は多く生産に用ひられるが、しかしそれは農業生産は極めて少く、多くは採銅鑄鐵、畜牛牧馬、手技作業等に官奴私婢を論ぜず使はれるものであつた。ところが漢朝は特別に重農主義で商工業は末技として抑制したものである。漢代の農業生産の情況はどんなであつたかといふに、天子はもともと一個の大地主であつて、史記の平準書では、山川園地市井の租稅收入は、天子から封君湯沐邑に至るまで、皆各私の奉養となし、天下の經費を領せずとあつて、地方の中小地主もすべて貧農を利用して耕作に従事せしめ、租稅を收取することは秦代と事情は違つてゐない。

「西漢の奴婢雖然也多用於生産、但用於採銅鑄鐵、畜牛牧馬、手技作業者多、而用於農業生産者極少、無論官私、都是這樣、漢朝是特別重農而抑制工商等末技的、漢朝的農業生産情況、是怎樣呢、天子本人就是一個大地主（史記平準書、山川園地市井租稅之入、自天子以至於封君湯沐邑、皆各爲私奉養焉、不領於天下之經費）一直到地方上的中小地主、都是利用貧農來從事耕作、收取租稅、和秦代的情形別無二致」と「奴隸制時代」では述べてある。秦の土地耕作の情形は、漢書食貨志、董仲舒、疏を郭沫若は引用して

「秦……用商鞅之法、改帝王之制、除井田、民得賣買、富者田連阡陌、貧者無立錫之地、又隴川澤之利、管山林之饒、荒淫越制、踰侈以相

高、邑有人君之尊、里有公侯之富、……或耕豪民之田、見稅什五、故貧民常在牛馬之衣、而食犬彘之食、……漢興循而未改」
とある。董仲舒は右のやうに、秦と漢の農耕の情形は同一だと明言してゐる。

かく秦漢農業の生産方式は一貫したものであつて、老百姓のあるものは田宅をもつてゐたが、豪農が兼併し、段々厲害を受け、その結果田をもつてゐた農夫も、轉落して佃農となり、土地は逐漸集中せられて大地主の手中に歸した。このことを郭沫若は漢書食貨志の文を引いてかう言つてゐる。

「今農夫五口之家、其服役者不下二人、其能耕者不過百畝、百畝之收不過百石、春耕夏耘、秋穫冬藏、伐薪樵、治官府、給徭役、春不得避風塵、夏不得避暑熱、秋不得避陰雨、冬不得避寒凍、四時之間、無日休息、又私自送往迎來、弔死問疾、養孤長幼在其中、勤苦如此、尙復被水旱之災、急政暴賦、賦斂不時、朝令而暮改、當具有者、半價而賣、無者取倍稱之息、於是有賣田宅、鬻子孫以償債者矣、而商賈大者、積貯倍息、小者、坐列販賣、操其奇贏、日遊都市、乘上之急、所賣必倍、故其男不耕耘、女不蠶織、衣必文采、食必粱肉、無農夫之苦、有阡陌之得、因其富厚、交通王侯、力過吏勢、以利相傾、千里游遨、冠蓋相望、乘堅策肥、履絲曳縞、此商人所以兼併農人、農人所以流亡者也」
農家は富商大賈の壓搾下にあつて、高利貸に苦しめられ、處置なしといふ状態である。田宅を賣り子孫をも賣るといふ言葉があるが田宅は誰が買ふかと言へば、富商大賈、子孫は誰が買ふかと言へば、これも亦富商大賈で、富商大賈は農民の田土を兼併し、彼等は自然に大地主となるのである。彼等は農民の子孫を買つて僮僕となし、更に商工業を有利に經營し、子孫は耕作には使はない。田地の耕作は僮僕の父祖にやらせ、その勞働力を搾取するのである。そこで農家は貧賤となり、一時流亡しても、いつまでも流亡は續けられず、また引返してもとの田地のあるところへ歸つて來て、土地を買つて貰つた人に雇はれて、雇農となる。これは即ち佃農である。漢代には農を重んじ、孝文帝の時にかつて田稅の一半を輕減し、甚だしきは免稅にしたこともある。孝景帝の時にも田稅を恢復したが、三十分の一の稅であつた。それでも無事に農業經營が出來なくて、大地主の兼併を抑制することが出來なかつた。

郭沫若はこのことを「奴隸制時代」で、次のやうに述べてゐる。

「農人在富商大賈的壓搾之下、困於高利貸、沒有辦法、只好（賣田宅、鬻子孫）田宅誰買了去呢、自然是富商大賈、子孫誰買了去呢、也是

他們、富商大賈兼併了農民的田土、他們自然是兼做着大地主的、他們買去了農民的子孫作爲僮僕、以從事於更有利的工商業的經營、無須乎要他們耕田、在耕田方面有他們的祖父便宜的勞働力可供搾取、農人貧賤了、即使一時流亡、卻不能長久、回頭只好還是回到田間、充當兼併者傭假、傭就是雇農、假就是佃農了、漢代爲了重農、在孝文帝時、曾經減輕田稅的一半、甚至免稅、孝景帝時又恢復了田稅、但只三十稅一、然而也無濟於事、並不能抑制大地主的兼併」

郭沫若が佃農といへるは、農奴といふべきものである。

郭沫若は漢書食貨志と王莽傳に見える

「漢代減輕田租、三十而稅一、常有更賦、罷癰咸出、而豪民侵陵、分田劫假、厥名三十（稅一）實什稅五也」

を引き、王莽の漢代に對する批評は甚だ根據あつて正確なもので、董仲舒が秦代を批評して、豪民の田を耕して稅什五であつたといふのと、先後一致してゐる。豪民は一面大地主となり、一面商工業を兼營し、最も殘酷に搾取したのは高利貸で、彼等は農民を搾取したばかりでなく、甚だしきは當時の王公をさへも剝削するに至り、その腕前は大了なものであつた。このことを郭沫若は「奴隸制時代」で

「這是王莽對於漢代的批評、當然是很有根據而正確的、這和董仲舒批評秦代、耕豪民之田、見稅什一、也先後合拍、豪民一面做着大地主、一面兼營工商業、而最殘酷的搾取就是高利貸、他們倒不僅搾取農民、甚至剝削到當時的王公、本領是不小的」

と言ひ、更に郭沫若は史記平準書に

「富商大賈、或蹕財役貧、轉轂百數、廢居居邑、封君皆低首仰給、冶鑄煮鹽、財或累萬金、而不佐國家之急」

とあるを引き、この貪婪の吸血者は國家と王侯貴族を侵蝕する手腕をもつてゐて、そこで漢代の政府は、彼等と鬭爭するに急であつた。漢武帝の緡錢令、師丹の限田令、後の王莽の變法など、すべて富商、大賈にしかねて大地主なるものとの鬭爭であつたが、すべて成功しなかつた。それでも漢武帝は一時的に財を劫収したが、根本では決して問題は解決されなかつた。その重要な原因は何であるかと言へば、即ち當時の王朝がそれ自體に最大の地主であつたがためである。王朝と富商大賈との爭は、同一階級の内部の矛盾に過ぎなかつた。富商大賈は一時的な打擊を受けても、結局はまた地主と政權を共にして結托し、豪商、地主、官僚の三位一體の體制が出来てゐた。かう郭沫若は「奴隸制時代

」で述べてゐる。

「這些貪婪的吸血者、有本領侵蝕到國家和王侯貴族、所以漢代的政府、便加緊和他們鬭爭、漢武帝的緡錢令、師丹的限田令、後來王莽的變法、都是和富商大賈而兼大地主者的鬭爭、然而都沒有成功、漢武帝雖然發了一時的劫收財、根本並沒有把問題解決、其主要的原因是什麼呢、就是當時的王朝、其本身就是最大的地主、王朝與富商大賈之爭、只是同一階級的內部矛盾而已、富商大賈受到了一時性的打擊、結果便更和地主與政權結托起來、而成為了豪商、地主、官僚三位一體」

上述の「蹠財役貧」「分田劫假」といふのは、西漢の全部の社會の經濟狀況を概括したものであると思ふ。「蹠財」の意義は、商品を賣惜しみて富積し、大利を種々の方法で搾取し、このやうにして貧苦の人民を奴役しようとの意をもつてゐるし、「分田」とは、土地を分租して貧苦に給し、貧苦の剩餘勞働を劫奪するものである。かうした情形からすれば、漢代の生産方式は、都市商工業ではなほ奴隸制が遺存したが、農業生産方面にあつては確實に典型的な封建制となつてゐた。また商業方面の奴隸もまた奴隸制時代の奴隸と同一ではなく、彼等の人格は多少は承認され、たとへ賣買はされても、なほ屠殺することは許されなかつた。

このことを郭沫若の奴隸制時代では

「上面所引證的資料中、蹠財役貧分田劫假、八個字、我覺得可以概括西漢的全部社會經濟狀況、蹠財的意義、包含着屯積居奇、大利盤剝、這樣來奴役貧苦的人民、分田是把土地相給貧苦者、而劫奪他們的剩餘勞働、故由整個的情形看來、漢代的生産方式、在城市工商業雖然還保留奴隸制遺、而在農業生産方面、則確實是典型的封建制了、何況工商業方面奴隸、也不同於奴隸制時的奴隸、他們的人權是多少被承認着的、縱可買賣、而已不能屠殺」

かうして郭沫若は結論として、西漢は奴隸社會たるの理論は成立しないとなし、たとへ意識形態上よりして、更に一層の證據をあげることが出來ると言つてゐる。それは漢武帝が儒家を尊重し、地主經濟の基礎の上に、封建道德の上層建築を、牢固として建立し、以後二千年以上の標準的封建制を定めたことである。西漢を奴隸制と説く學者は、この一つの無法の解決に碰着するの矛盾を自覺しないで、孔子と儒家との學説は、封建理論たることを承認しながら、西漢の生産關係は、奴隸制的段階にあると主張してゐるが、これは奴隸制社會基盤の上に封建制

上層建築を樹立してゐると説くやうなものではないか。このことを「奴隸制時代」には、次のやうに述べてゐる。

「準上、我可以下出一個斷案、認西漢爲奴隸社會の説法不能成立、假使再從意識形態上來看、更可以得到一層佐證、漢武帝尊重儒家、在地主經濟的基礎之上、把封建道德的上層建築、牢固地建立了起來、奠定了以後兩千多年的標準的封建格局、西漢奴隸制說者、在這裏不自覺地碰着了一個無法解決的矛盾、他們承認孔子和儒家學說是封建理論、而卻主張西漢的生產關係還在奴隸制的階段、這豈不等於說、在奴隸制的社會基礎之上樹立了封建制的上層建築嗎」

一九三〇年に郭沫若が「中國古代社會研究」を公にし、それから一九三四年に呂振羽が「殷代的奴隸社會」を公にした。この「殷代的奴隸社會」では、前の郭沫若の「中國古代社會研究」に反對して、殷代が奴隸制社會であることを主張する。

呂振羽は「中國社會史綱」の第二卷奴隸社會及初期封建社會において、かう言つてゐる。

「殷代社會從可靠材料中所能說明的諸特徵、概括的說

(一) 業已使用着足以產生相當剩餘勞動量的勞動工具、生產的直接擔當者、主要則係作爲奴隸、而被使用的戰敗的俘虜、戰勝者和其集團、則已經從生產領域中脫離了出來

(二) 農業和畜牧均已達到很繁盛的程度、而且後者已退處於前者的從屬地位、手工業有相當高度的發展和相當高度的分業

(三) 在生產的組織上、則具備一種父家長制的支配下的村落公社的組織、土地爲國家所有而實行分配於各族長家長

(四) 在財產的形態上、主要以家畜和奴隸的數量去表現、除不動產的土地外、其他便都已存在於私有制度之下、掌握於父家長的手中

(五) 在村落公社之上、則已經具有強制的政治權力的國家、政權掌握在僧侶貴族和世俗貴族的手中、藉世襲國王的名義去行使

(六) 在貴族和奴隸之間、有中間的自由民階級存在

(七) 已應用着作爲紀錄的形聲文字、能書寫有韻詩歌、發明着閏年和常年大月和小月之分的天文歷數、並有精巧的藝術作品」

とあつて、以上の一―七の各項目に互つて、呂振羽は一々實例をあげて説明してゐるが、ここでは省略する。

しかして、かうした殷代の社會的な諸特徴からして、呂振羽は殷代社會を、原始共產制の域を脱して、既に階級社會となり、奴隸制社會に

なつてゐたと判斷し、

「這些存在着的諸特徵、一方面指明着階級社會的國家的組織存在、同時在這種國家的組織內、主要由同一種族內的一個集團形成其社會的支配階級、作爲奴隸而被使用的被支配階級、主要係由於戰爭的俘虜而來的異族人、一方面社會的組織形態、却是氏族社會末期之一種村落公社的形態、祇是已失去其政治的機能、

具備這種形態的社會、便表現爲一種初期國家的奴隸制度」

と言つてゐる。

この呂振羽の殷代奴隸制社會説は郭沫若の「奴隸制時代」が公刊される數年前のことであるから、殷代奴隸制社會説を唱へた學者は郭氏より呂氏が早い。これで殷代が奴隸制社會であつたといふことは、兩人の説が結果的に一致したわけであるが、呂振羽は、西周社會が既に封建社會になつてゐたと見るところに、郭沫若とは著しく意見の對立が見られる。

呂振羽はその著「中國社會史綱」において

「他們（周族）對殷代Ⅱ奴隸所有者最後的一次戰爭、從信史考證、爲紀元前一千一百二十二年、受辛三十三祀的一次戰爭、殷代Ⅱ奴隸所有者被革命勢力所戰敗、其國家便歸於滅亡了、周人一方面把原來的奴隸解放、一方面把殷代國家的土地所有宣佈爲王的所有、王又以這種土地去酬庸其左右扈從和隨同去伐殷的各氏族酋長、這種受有土地的王扈從和酋長、又皆相次的以之去酬其自己的左右、於是他們便轉化而成了土地的新所有人、從而開始把原來的村落公社轉化爲莊園、把原來土地上的居民重新編制而把他們轉化爲農奴、這樣、國家又在這一新的形勢上出現了」

這新的國家的社會機構、一方面從奴隸所有者社會的世界原理Ⅱ國家的土地所有和國家支配下公社組織的原理出發、一方面從其自身氏族社會的世界原理出發、由這兩種原理的合流而創造其新社會、易言之、從國家的土地所有之種族財產形態以及國家支配下之公社內的家庭財產形態、和其氏族村落公社的氏族財產形態、各種要素之矛盾鬭爭的統一而轉化爲莊園制的封建財產形態和農奴經濟」

といひ、孔子集語から

「載干戈以至於封侯、而同姓之士百人、孔子曰、……猶以周公爲天下賞、則以同姓爲多、異姓爲寡也」

を引き、左傳僖公二十四年から

「昔周公吊二叔不咸、故封建親戚、以藩屏周、管蔡郕霍魯衛丰軌郕雍曹滕畢原鄭郕文之昭也、邶晉應韓武之穆也、凡蔣邢茅祭胙、周公之胤也」

を引き荀子儒効篇から

「周公畫制天下七十一國、姬姓獨居五十三」

を引き、左傳定公四年から

「魏子謂成縛曰、武王克商光有天下、其兄弟之國十有五人、姬姓之國四十人、皆舉親也」

を引き、史記漢興以來諸侯年表から

「武王成康所封數目、而同姓五十五」

を引き、舊説から

「武王分殷地爲鄩鄩衛、封武庚於鄩、使管叔尹鄩、蔡叔尹衛」

を引いて、諸侯分封の證となし、次に一度王の所有と宣佈した土地を王名により、再び氏族の酋長に封賜した證として、周書の武成から

「庶邦冢君、百王、受命於周」

を引き、立政から

「式商受命、奄甸萬姓」

を引き、大傳から

「征東之諸侯、虞夏商周之胤」

を引いてゐる。更にまた周室と諸侯との冊命儀禮の資料として、左傳定公四年の

「昔武王克商、成王定之、選建明德、以藩屏周……分魯公以大路大旂、殷民六族……使帥其宗氏、輯其分族、將其類醜、以法則周公、用卽令於周……分之土田陪敦、祝宗、卜史、備物典策、官司彝器、因商奄之民、命以伯禽、而封於少皞之虛、分康叔以大路少帛、續茂、旃旌、大呂、殷民七族……封畛略自武漢以南及圃田之北之竟、取於有閭之士、以供王職、取於相土之東都、以會王之東蒐、聃季授土、陶叔授民……而封於殷虛、皆啓以商政、疆以周索、分唐叔、以路密須之鼓、闕鞏、沽洗、懷姓九宗、職官五政……封於夏虛、啓以夏政、疆以戎索」と言へるを引き、また孟鼎銘に

「受民受疆土」

とあるを引き、また詩經の魯頌閟宮に

「錫之山川、土田附庸」

とあるを引き、さらに召伯虎の敦銘に

「僕庸土田」

とあるを引き、かうした土地の賜與は、決して單純な封土ではなく、土地を受有する貴族は、その所有地に對して、同時に完全な政治上軍事上の權力を具有するものであるといふ。

「因而這種土地的賜與、並不是單純的封土、受有土地的貴族、在其所有地上面、同時並具有完全政治的軍事的權力」
更に呂振羽は、周書文侯之命の

「其歸視爾師、寧爾邦」

「簡恤爾都」

康王之誥の

「昔君文武、不平富寵之士、不二心之臣、保乂王家……乃命建侯、樹屏在我後之人」
畢命の

「族別淑慝、表厥宅里、彰善癉惡、樹之風聲、……殊厥井疆……申畫郊圻、填固封守、以康四海」

左傳隱公八年的

「公問族於衆仲、衆仲對曰、天子建德、因生以賜姓、昨之土而命之民、諸侯以字爲諡、因以爲族、官有世功、則有官族、邑亦如之」
周書立政の

「宅乃事、宅乃牧、宅乃準」

魯語上の乙喜が齊侯に語つて言ふ

「昔者成王命先君周公及齊先君大公曰、汝股肱周室、以來輔先王、賜女土地、質之以犧牲、世世子孫毋相害也」

魯頌閟宮の

「王曰叔父、建爾元子、俾侯於魯、大啓爾宇、爲周室輔、錫之山川、土田附庸」

等を土地分賜の證とし、この種の土地分賜は、各階級の封建領邑と莊園をつくり出し、従つてこれが封建階級に従屬の基礎をさだめることになつたと、呂振羽はいふ。

「所以這種土地的分賜、便創出各級封建領邑和莊園、從而便奠下了封建的等級從屬的基礎」
荀子の王霸篇の

「傳曰、農分田而耕……建國諸侯之君、分土而守」

といへるを引き、卡爾の

「封建時代之軍事上及裁判上の最高權力、是土地所有的屬性」

と言へるを引いてゐる。

次に呂振羽は西周社會の直接的な生産組織について

「他們怎樣去建立新的土地秩序呢、殷的國有土地、是存在於一種村落公社、卽邑的區分形態下、在公社內存在着貴族下層自由民和奴隸之階

級的生産組織、周朝新國家的王、以這種土地去分賜其左右和其臣屬、也是依照着原來土地區分的形式去行使的、並不是原來的公社、即邑的土地組織分裂、所以金文記載、以錫邑和錫田、……中略……

受有田・邑者、都成了新時代的封建貴族、其所受有的土地、不是單純概念下的土地、而是連同土地上的居民、已如前述、但是一方面、原來在這種公社即田・邑上的居民爲奴主下層自由民和奴隸、奴隸是生産的主要擔當者、這種擔任生産的奴隸、現在却得到部份的解放、而和其他下層自由民具有同等的半人格了、一方面、原來的公社Ⅱ田・邑雖係在國家的支配下、然在其內部的結構上、却具有相當的獨立性、因而新的土地貴族於獲得這種田邑的支配權之後、在其原有的機構上、進行其對居民的勞働編制、便很自然的把他們轉化爲農奴、把原來的公社給與自由民的分地、現在則由新的土地所有者作爲其給予農民的分有地、同時、原來公社的政治機構、現在則移入新的土地所有者手中、便轉化而爲領邑的政治機構、具有管理領邑的政治組織、以及其防禦上的軍事設置

と説明し、その例證とし、王孫遣の諸鐘銘をひき

「延口餘德、蘇弘民人、餘專揚于國」

といひ、周語を引き

「諸侯春秋受職于王、以臨其民、大夫日格位著、以做其官、庶人工商、各守其業、以共其上」

といひ、周書の立政を引き

「宅乃事、宅乃牧、宅乃準」

といひ、左傳の襄公十四年を引き

「（師擴說）自王以下、各有父兄子弟、以補察其政」

といひ、周書の酒誥を引き

「越獻臣百宗工、矧惟爾事、服休服采、矧惟若疇、圻父薄違、農父若保、宏父定辟、矧汝剛制于酒」

といひ、豳穀銘をひき

「王虻使焚藺、令往邦、乎呼繹旂、用保乃邦」

といひ、詩經の秦風の無衣篇を引いて

「王欲興師、修我矛、與子同仇」

といふ。かうして呂振羽は

「因而原來的公社——田邑便完全轉化爲封建主義的莊園了、

於是王公侯……們所賜予其左右的土地、如果僅係單純概念下的土地、便同時賜之以官司及勞働人口、使之依照這種新的莊園的組織原理」
といふ。

西周の封建社會の土地制度の内容は孟子の所謂井田法そのものとは違ふが、その内容は似たところがあることを呂振羽は認めてゐる。

「孟軻之井田の説明、却不是西周井田の内容、而是莊園的土地制度的内容、他把土地制度和技術上的灌溉制度混淆、纔構製出井田制度的理論來」

と彼はいひ、また

「孟軻這段話、除所謂方里而井云々之理想化的部分外、證之詩云、雨我公田、遂及我私、惟助爲有公田、由是言之、雖周亦助也、不啻是雨我公田、遂及我私、一語的社會内容之説明、因而在孟軻所解釋的井田制度的内容——無論在土地的分配上、生產的組織上、便完全符合於初期封建時代莊園制的内容、而構成爲同一之剝削關係、因而孟軻的井田制度圖式、無疑是以這種莊園的組織爲依據而構製起來的、所以西周的土地制度雖不是井田制度、而孟軻所說的井田制度、却相對的說明了莊園制度的内容」

とある。

呂振羽は西周農民の剩餘勞働に關して、次のやうに説明してゐる。

「在賦的方面、農民除去一小部分的勞働時間、在自己的分有地、即所謂私田上勞働之外、則以一部份勞働時間支付在領主的土地即所謂公田上去勞働、這在金文和詩經上、都有明白記載、金文中如、官鬲成周、貯甘家、（頌鼎銘）格伯毀衣馬乘於佃生、卑（厥）貯卅田、（格伯毀

銘）郭沫若云、貯、賦也、是所謂貯廿家、卽係其領有廿家農奴爲其提供勞役地租之謂、所謂、貯卅田、卽係賦取在其領地上的農民的剩餘勞働之謂、在詩經上、又有如次一類的記載」

といひ、次に詩經の中から引證四をあげてある。

「有渰萋萋、興雨祁祁、雨我公田、遂及我私」（大田）

「率時農夫、播厥百穀、駿發爾私、終三十里、亦服爾耕、百千惟耦」（噫噫）

「倬彼甫田、歲取百千、我取其陳、食我農人、自古有年、今適南畝、或種或耔、黍稷薿薿」（甫田）

「王錫韓侯、其追其貊、奄受北國、因以其伯、實墉實壑、實畝實籍、猷其獯皮、赤豹黃羆」（韓弈）

これだけでも西周の農民はその勞働を相當酷使されてゐるが、かうした酷使には特設の監督者があつたり、また領主自らその監督に當つてゐたと、呂振羽はいふ。

「一方面、領主除特設一種監督農民勞働の使用人＝田畯外、爲擴大剩餘勞働量的獲得而提高勞働強度起見、還不時親自去監察」さうした例證として詩經の

「曾孫（領主）來止、以其婦子、……禾易長畝、終善且有、曾孫不怒——農夫克敏」（甫田）

「既方既皂、既堅既好、不稂不莠、去其螟蟘、及其蟊賊、舞害我（領主）田穉」（大田）

をあげてゐる。かうした農民の酷使は勿論領主自身の富のためであつて、農民の農事には全然無關心のものである。

「這樣所關注的農事、不是關於農民在其分有地上的農事、而是其在領主土地上的農事、目的是爲求千斯倉萬斯箱的生產物的獲得」ここにも詩經甫田の詩を引いて

「曾孫（領主）之稼、如茨如梁、曾孫之庾、如坻如京、乃求千斯倉、乃求萬斯箱、黍稷稻粱、農夫之慶、報以介福、萬壽無疆」

とある。そこで當時の農民たちの生活の實情は、實際農奴と言はれるに慣するものであつたであらう。

「實際這於農民有何慶何福呢、不過得以省免一些鞭打和毒罵罷了、那麼、如果曾孫所要求的剩餘勞働生產物量、不得到充分的滿足、那就無

疑是農民們的憂、必然要報以介禍、而是夭壽無疆的吧」

さらに西周の農民の使用した農業用具は大概領主から特に給予されたのであるが、農人自らのものもあつた。給與されたものを損傷すると責罰を受けねばならなかつた。

「農民們在農業上所使用的勞働用具、就一般說、都是領主所給予的、同時又有特殊的爲農民自己所有者、不過農民所使用的勞働工具和家畜如係領自領主者、損傷時便要受責罰」

これに就いても、次の例證がある。

「大田多稼、既種既戒、既備乃事、以我（領主）覃耜、椒載南畝、播厥百穀」（詩經、大田）

「命我衆人、庀乃錢鎛奄觀銍艾」（詩經、周頌、臣工）

「今惟淫舍牯牛、牯之傷、汝則有常刑」（尚書、周書、費誓）

（この項未完）